

T 21 粗砂層を南北に掘り込む暗灰色シルト層の落ち込みと、東西に流れる溝状遺構を検出した。シルト層の落ち込みと溝状遺構の前後関係は、溝状遺構が古い。遺物は落ち込みからは無く、溝状遺構は古墳時代の土師器片、須恵器片（5世紀末～6世紀）が出土している。溝状遺構は堆積状況から自然河道の一部とみられる。

T 18 トレンチ西端で灰褐色シルト層の落ち込みを検出した。落ち込み内は砂層とシルト層が相互に堆積することから北東から南東方向に流れる自然流路の肩とみられる。

T 7 5層（暗褐色粘質土）上面には、耕作とみられる波状の掘削痕が顕著に認められる。なお、同様な痕跡は、他のトレンチでも部分的に確認された。遺構は検出されなかった。

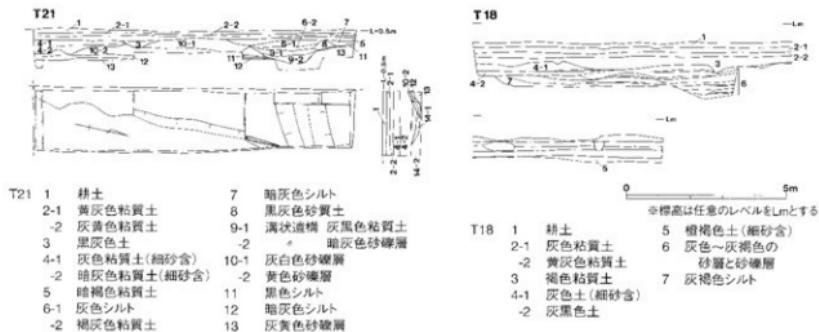


fig. 354 T 21・18 土層図・平面図

3. まとめ トレンチ調査の結果、現在の丸塚集落西側砂礫層や、シルト層と砂層の相互堆積が広範囲で認められ、河道の一部も検出された。土層観察などから、檍谷川の氾濫による土砂堆積によって形成された小規模な自然堤防や後背湿地がいくつも広がっており、当時は微妙な地形の起伏があったとみられる。

今回の調査範囲内ではT 1～6、22～24において、黄灰色系の細砂～シルト質のしっかりした基盤層が認められた。現集落の北西にあたるこのあたりが自然堤防による最も残りの良い微高地とみられる。そしてこの面で竪穴住居や土坑などの遺構がT 24、4、5で確認された。周辺の洪水砂の中から流れ込みとみられる弥生時代後期の土器や古墳時代の土師器・須恵器が出土していることから、この微高地に弥生～古墳時代の集落が位置する可能性がある。なおこの微高地の規模は、長さ約100m、幅約30mで南西にのびている。

中世期の生活遺構はT 3～6、24、25でピット、土坑、溝状遺構が確認され、トレンチ内にみられる褐色～暗褐色粘質土（基本層序のⅢ層）上面または耕土下の黄褐色極細砂層（基本層序のⅡ層）で検出された。埋土は灰色～灰白色粘質土である。このⅢ層は、弥生時代～古墳時代の後背湿地の土壤化や河川の堆積作用によって平坦に堆積したものであり、Ⅱ層はその後の堆積層である。これらの上面が中世の遺構面になるが、Ⅱ層上面では遺構埋土の識別が難しいため、Ⅲ層上面で検出した遺構のうちⅡ層から掘り込まれたものが多いとみられる。なおⅡ・Ⅲ層は比較的広範囲に堆積しているので、中世遺構は調査区西端まで広がる可能性があるが、最も密に分布するのは先述した微高地周辺とみられる。

III. 平成7年度の通常事業に伴う発掘調査

1. 本山遺跡 第17次調査

1.はじめに

本山遺跡ではこれまでに16次にわたる調査が行われておらず、弥生時代前期から中期の流路や土坑が検出されている。そこからは、縄文時代晩期の土器や弥生時代前期から中期にかけての多数の土器や石製品、木製品が出土している。またこのほかに平成元年度の調査では、弥生時代中期の銅鐸が出土していることは注目される。

第17次調査は共同住宅建設に伴う調査である。

本山遺跡の旧地形は国道2号線を挟んで北側と南側では大きく異なり、北側では更新世段丘面が現地表面から浅い位置で顕れる。南側では縄文海進時の海食崖があり、その南側には沖積地が広がる。今回の調査地点は、国道2号線の南側に位置する。

今回の調査は建物の建設予定範囲のうち、試掘調査によって埋蔵文化財の確認されなかつた東側の一部を除いて調査の対象地とし、当初は建築計画によって埋蔵文化財の破壊される建物基礎部分に関してのみ調査を実施した（Ⅰ期調査）。その後建築の設計変更があり、調査対象地全域に建物基礎が敷設されることとなった。そのため、残りの部分に関して、工事により埋蔵文化財が影響を受ける深度までの調査を実施した（Ⅱ期調査）。



2. 調査の概要

基本層序

基本層序は上より、明灰色細砂（近世～現代耕土）・灰色シルト（中世～近世耕土）・褐色シルト（中世耕土）・暗茶褐色シルト質砂（弥生時代中期遺物包含層）・暗茶褐色粗砂（洪水砂）・暗灰色シルト（弥生時代前期遺物包含層）・明灰色砂混じり粘土ないし

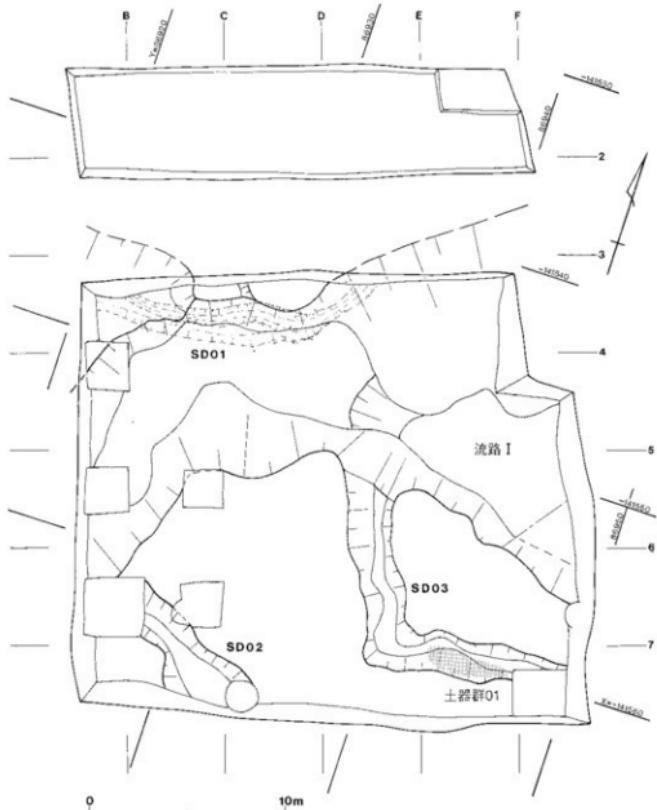


fig. 356
遺構平面図

は淡茶灰色シルト～中砂（弥生時代前期遺構面ベース）となる。

遺構 検出された遺構は、弥生時代前期初頭の流路1条、溝2条、弥生時代前期中頃から後半にかけての溝1条である。

流路 I 弥生時代前期前半の流路である。調査区内では幅約10m、深さ1.5～2.5mを測り、西から東に向かって流れている。調査区の東に向かって深くかつ広くなっている。試掘調査では、調査地の東端を南北方向に流れている大きな川に、調査区の東側で流れ込むようである。

この流路内の最下層からは弥生時代前期初頭（畿内第I様式古段階）の甕、壺や縄文時代晚期の突帯紋土器などの土器類とともに、斧柄・鎌・鍬・泥除け・臼などの木製品とその未製品および加工木材が多数出土している。また箕等の編み物が8点出土している。

中・上層からは弥生時代前期中様～後半（畿内第I様式中・新段階）の土器と木材が出土しており、この流路が最終的に埋まったのはこの時期と考えられる。



fig. 357
流路 I



fig. 358
流路 I 斧柄出土状況



fig. 359
流路 I 白出土状况



fig. 360

流路 I

遺物出土状況平面図

0

5m

SD02 調査区の南東において、北西から南東方向に流れる溝である。幅1.2～2.5 m、深さ0.4 mを測る。遺物は弥生時代前期の土器の小片のみである。時期は層位より弥生時代前期前半と考えられる。



fig. 361
流路 I 木製品出土状況



fig. 362
流路 I 斧柄出土状況

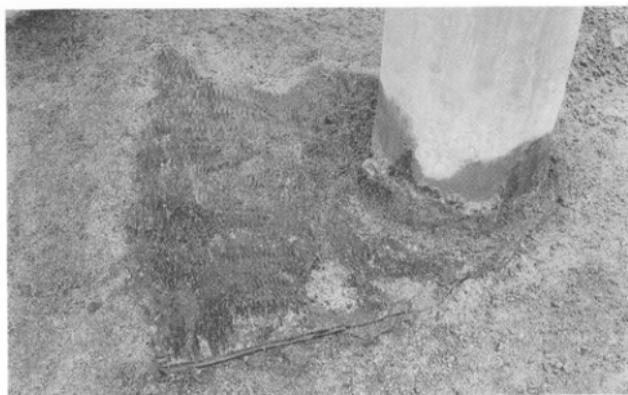


fig. 363
流路 I 織物（箕）出土状況



fig. 364
SD01 桁列・しがらみ

SD03 調査区の東半において、流路 I から南に流れ、11 m の地点で 90 度東に折れて流れる溝である。幅 2.5 m、深さ 0.6 m で断面形は緩やかな V 字状を呈している。屈曲点の東の南側の肩において土器溜りが存在する（土器群 01）。流路中ににおいて堰等の施設は確認されなかったが、その形状より流路からの導水路と考えられる。層位や前記の土器群中の土器より弥生時代前期前半の溝である。

SD01 流路 I が最終的に埋まる段階で、その北肩付近においてかつての流路に沿って造られた溝である。溝は西から東に向かって流れ、調査区の中央でその方向を若干曲げて北東方向に流れている。幅 1.2 ~ 1.5 m、深さ 0.5 m を測り、溝の両側には杭が打ってある。この溝の方向が変化する調査区の中央付近の南側の杭列では、杭の間隔を狭くし、溝の内側に葦状の植物で護岸を施したしがらみが存在する。この溝は埋まって行く毎に造り替えているようで、杭列は數列存在し、セクションの断面からもそのことがうかがえた。溝の時期は弥生時代前期中様と考えられる。

3. まとめ

今回の調査では、流路より弥生時代前期初頭の多量の土器・木製品が出土したことが特に注目される。この時期の木製品は全国的にも出土例が少なく、稻作開始期における農耕技術を知る上で重要な資料である。またその木製品には木製品も多く、加工材も多く出土しており、また出土した土器や木製品の遺存状況も良好であることから、付近にこの時期の集落が存在することが想定される。

また、流路の最終埋没段階で造られた溝 SD01 はその両側に杭を打ち、葦等で護岸を施した溝である。当時の用水技術を知る上で貴重な資料となる。



fig. 365 SD03 遺物出土状況平面・断面図

2. 篠原遺跡 第12次調査

1. はじめに

篠原遺跡は、六甲川と榎谷川が合流する北側、標高50~80mの扇状地上に立地する縄文時代~中世に至る複合遺跡で、これまでに11次の調査が行われている。

これまでの調査では、縄文時代晚期後半の埋甕などの埋納遺構が確認され、遺物としては述光器土偶や多量の石棒類が出土し、近畿地方を代表する縄文時代晚期の遺跡として注目されている。弥生時代の調査では、後期の竪穴住居などの集落址の一部が調査されており、六甲山南麓の緩傾斜地に占地した縄文時代から弥生時代の集落の一端がうかがわれる。

この調査地の周辺では、第8・10・11次調査が実施されている。第8次調査では弥生時代後期の竪穴住居なども確認され、この付近では、弥生時代後期の遺構と中世の遺構が多く確認されている地点である。

今回の調査は、この地に店舗が建設されることに伴い、建物基礎工事によって遺跡に影響が及ぶ部分について発掘調査を実施した。調査地点の標高は約79mである。

2. 調査の概要

基本層序 基本的には第1層（盛土・擾乱）、第2層（旧耕土）、第3層（床土）、第4層（黒褐色砂質土）、第5層（灰黃褐色砂質土）となる。第4層が遺物包含層で、第5層上面が遺構面である。

調査区は現状ではほぼ平坦であったが、近世以降に水田を造成する際、棚田状に造成されているため、調査後は大きく3段の平坦面が検出されることになった。その水田の造成に伴い第4層・第5層が大きく削平を受ける部分があり、第2層直下で遺構が検出される部分も存在した。



fig. 366
調査位置図
1 : 2,500

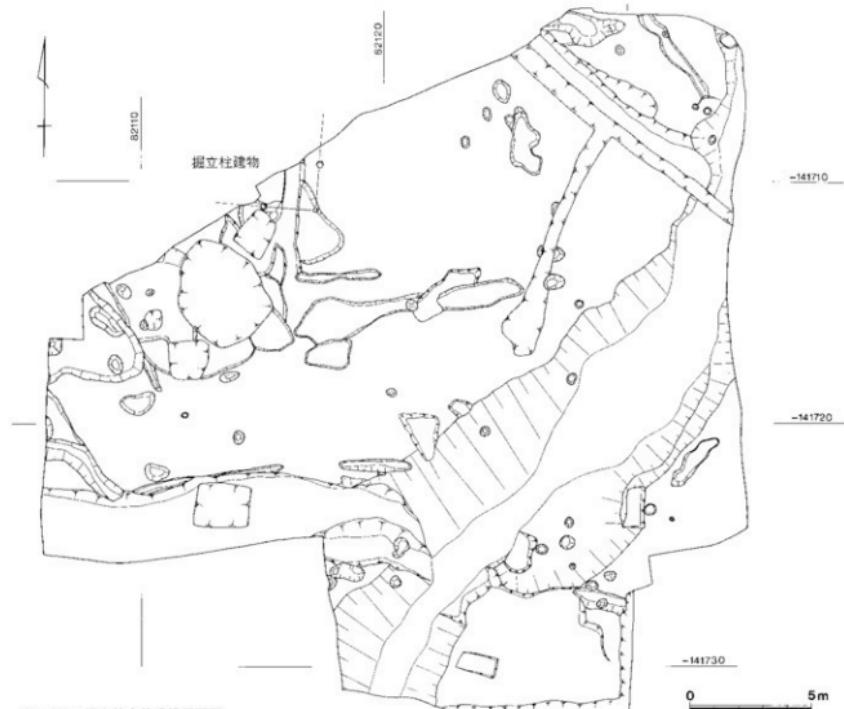


fig. 367 調査地全体遺構平面図

検出遺構

近世の遺構としては、水田を造成した際の暗渠排水施設が造成された水田に沿うように

(近世) 「T」字状に確認されている。これは、拳大～人頭大の河原石を使用しており、溝の両側に石を立てその上に比較的偏平な石で蓋をしている。非常に丁寧に作られたものである。

この施設内からの遺物の出土はなかったが、造成に伴う整地土内の遺物から近世段階の遺構と考えられる。

(中世)

中世の遺構としては、掘立柱建物が調査区の北側で1棟確認されている。1間×1間以上の建物であるが調査地区外へ拡がるため、規模については明確にできなかった。柱穴内から束播系の須恵器の塊が出土していることから、鎌倉時代前半期の掘立柱建物であったものと考えられる。

他に中世の遺構としてはピットや不定形の土坑などがあるが、遺物は須恵器の塊や土師器の小皿の細片が出土しているのみである。時期的には掘立柱建物とはほぼ同時期の遺構ではないかと推定される。

(弥生時代)

今回の調査で確認された時期の特定できる遺構の多くは弥生時代の遺構であった。検出された遺構は、土坑、ピット、溝などがあるが、今回の調査においては堅穴住居は検出されなかった。



fig. 368
調査地全景（南西から）



fig. 369
大溝 SD01（南西から）



fig. 370
縄文時代土坑 SK08

土 坑 土坑は不定形の浅い土坑が多く、その用途については不明である。土坑の埋土には弥生時代中期以降の遺物を多量に含んでいるが、時期については弥生時代後期のものが主体と考えられる。

SD01 今回注目される遺構の1つに弥生時代後期の大溝（SD01）がある。この溝からは多量の弥生土器が出土し、上面から小型彷製鏡（乳文鏡）が1点出土したためである。

この大溝は、北東方向から南西方向に流れるもので最大幅8m、深さ50cmを測る。幅は広いが比較的浅い落ち込み状の溝である。今回の調査では約30m分を検出している。埋土は大きく3層に分層が可能であったが、最下層に弥生時代中期の遺物が比較的多く含まれるもの、それ以外の遺物に関しては、弥生時代後期後半の遺物として捉えられるもので、大きな時期差を認めることはできないものであった。

小型彷製鏡 小型彷製鏡は、弥生時代のものとしては市内で4

例目（県下で9例目）の出土となる。約2分の1を欠損しているが復元径約9.0cm、厚さ約1mm、紐径約1.6cmを測る。文様構成は外から平縁（10mm）→櫛齒文（左回）（2mm）→文様帶〔乳状突起（現存4個・復元6個）・圈線1条〕（23mm）→紐座（紐）（10mm）となる。櫛齒文の間には朱（ベンガラ）の痕跡を留めている。この彷製鏡の特徴は、文様帶に

乳のみを配置していることである。本来は内行花文 fig. 371 小型彷製鏡



帯を持つべきものであったが、それが省略されたものではないかという指摘がされている。このような型式のものは、これまで国内では確認されていない新しい型式の彷製鏡で、小型彷製鏡の產地の1つである九州地方にはない特徴で、近畿地方で製作された可能性が高いのではないかと推定される。また、櫛齒文の間に遺存するベンガラは当時の鏡の持つ祭礼的な意味合いの一端をうかがうことができる貴重な資料である。

[縄文時代] 土坑（SK08）が1基確認されたのみであるが、埋土からは復元可能な大型の深鉢が1点出土している。これは後期の粗製の深鉢の系譜を引くものと考えられ、後期の前半段階の遺物ではないかと推定される。

3.まとめ

今回の調査では、弥生時代の堅穴住居は確認されなかったが、後期後半の土器を多量に含む大溝が検出され、その上面から小型彷製鏡が1面出土した。これは先述したように新しい型式の彷製鏡で、近畿地方の新例として出土した土器とともに注目される。また、篠原遺跡が弥生時代後期に當時希少品であった小型彷製鏡を入手可能であったことなど、後期の篠原遺跡の集落範囲の広さともあわせて相当有力な集落の1つであったものと考えられる。

そして、今回新たに縄文時代後期前半の遺構・遺物が確認されたことは、当地周辺に該期の集落が拡がっていたことが明らかになった。傾斜地であるため後世の削平によって遺存状況が悪かったため、これまで確認できなかったものと考えられる。第8次調査の際には縄文時代晩期後半の遺物が出土していることから、縄文時代の集落範囲も弥生時代の集落範囲とそう変わらない規模であった可能性が高い。

3. 祇園遺跡 第5次調査

1. はじめに

祇園遺跡は神戸市兵庫区上祇園町周辺にひろがる遺跡で、天王川左岸の扇状地の扇頂付近に位置する。天王川は有馬道沿いに流下し平野部に抜け、石井川と合流して淡川となる。この淡川の河口付近にかつて大輪田泊があったと言われている。

この遺跡の存在する地域は「ひらの」とよばれ、この地名が治承4年の「福原遷都」に際し安徳天皇内裏となった平清盛の別業のあったという「平野」の地名と合致し、当地に福原旧都の中枢があったものと推測される。しかし、考古学的な調査によって福原京に関する遺構が確認された例は、平野から600mほど南の荒田の地で検出された堀をめぐらす邸宅跡（楠・荒田町遺跡〔神戸大学病院地点〕）が唯一といってよいほどで、福原旧都の具体的な解明を行えるまでには至っていない。

昨年度行われた祇園遺跡の第1次調査では、縄文時代・弥生時代・室町時代などの遺構のほか、顯著な遺構はなかったものの、平安時代末・福原旧都当時の遺物がかなり出土している。昨年度の第2次調査では、一昨年度に引き続いて神戸三田線の拡幅計画部分、第1次調査地点の南についてこれを行った。調査の結果、縄文時代・弥生時代・古墳時代・平安時代・室町時代・江戸時代の遺構および遺物が確認された。調査地は北から南への傾斜地であるが、平安時代末に斜面地を段造りし、その後近年にいたるまで土地区分はそのままのかたちではほぼ踏襲されていることが確認された第2次調査においては、南北に段造成3段分が確認されている。北部が第1次調査地の南部から続く高い面、中部がその次、最下が南部の園池となる。北部・南部では、上層の弥生時代～江戸時代の遺構面の下層が縄文時代の流路の埋没土となっている。



fig. 372
調査地位図
1 : 2,500

2. 調査の概要 今回の調査区では、先年度まで他時期と同一面で検出されていた弥生時代の遺構を、平安時代から江戸時代の下面で検出した。

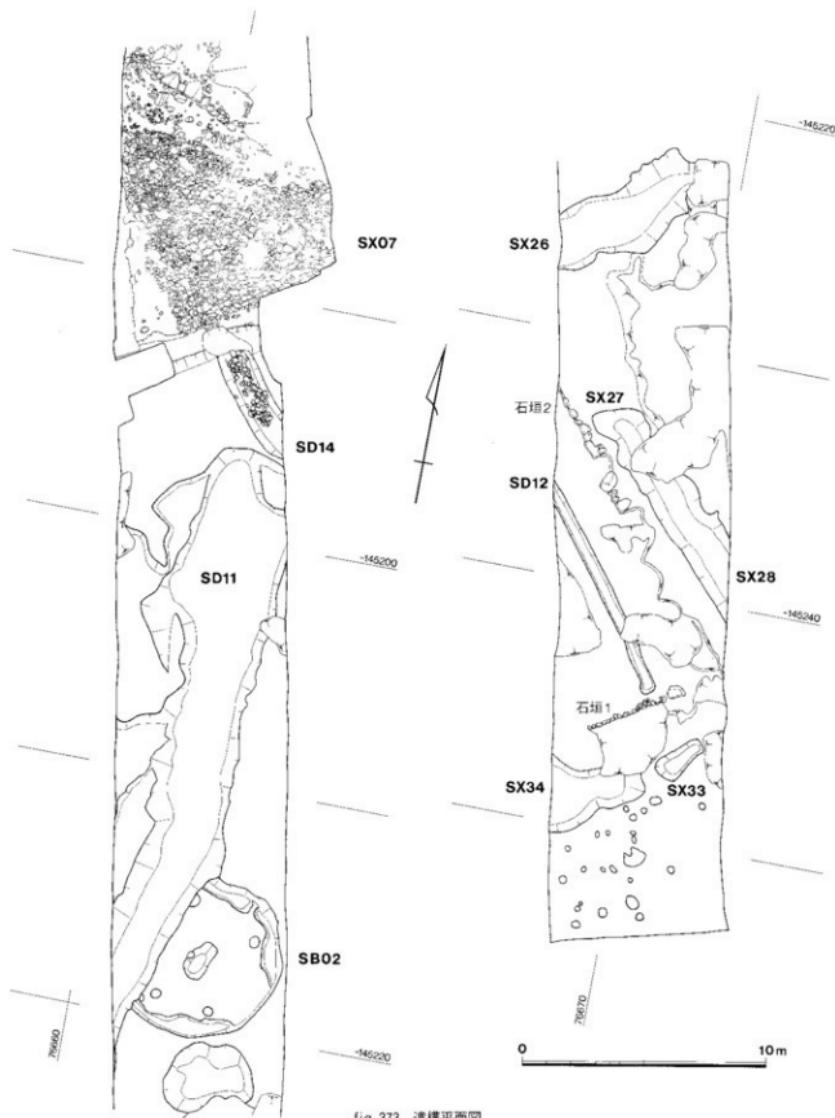


fig. 373 遺構平面図

SB02 調査区北半の中央部に位置する竪穴住居である。西側の一部を SD11 に切られている。直徑約 6.6 m、面積約 34m²、ほぼ円形を呈する。残存している周壁高は 7 ~ 16cm、周溝の幅は約 90cm、深さは 2 ~ 8 cm を測る。中央には長径 1.5 m、短径 90cm、深さ 30cm の中央土坑がある。埋土上には炭が多量に含まれていた。中央土坑の東に焼土（径 25cm）がある。柱掘形は、直徑約 45cm ほどのものが計 4 基確認されている。柱穴の位置からみて 5 ないし 6 本柱の建物と思われる。

住居の時期は、出土遺物から弥生時代中期後半に属する。

SD11 調査区北部に位置し、幅 5 m、深さ 0.4 m を測る、南北に走る流路である。埋土は、下層が礫で上層は黒褐色シルトである。

時期は、出土遺物から中世には埋没し、その機能を終えたものとみられる。但し、園地に取りつく溝（SD14）のベースになる土層を埋土としており、園地に先行する遺構と考えられる。

庭園遺構 この遺構は調査区外に更に広がり、調査ではその一部を検出したにすぎない。

(SX07) この遺構は、大きく 3 時期に区分される。まず島を持つ段階、島を埋めて石垣を築く段階、南の堤が洲浜になる段階である。

第 I 期 島を持つ段階は、地山を掘削し、池底を形成する。池底は、地山にある石材を利用しながら、こぶりの礫を張りつけている。南側には堤を設け、1 m 程の段差をもつ。島は、地山を整形したあと、大きな石を配し、砂を盛り、後に細かい砂で整形して固めている。落とし口は、その北側に 1 × 1 m ほどの面積を少し掘り下げ、砂を敷き、平らな石を敷きつめ、南側の部分では面を揃えて 1 段下がる構造を持つ。敷石は、南に下がっており、それに伴い、両側の石材は水を集めるように徐々に立石状に変化する。敷石の南側が 1 段下がっている構造は、その部分の埋土が青灰色に変化していることから、水流に濁りがあったと考えられ、「会所」の様な機能を果たしていたと考えられる。但し、断面では青灰色に変化している部分は認められず、幅 90cm にわたって最下層の部分では砂層の堆積が認められる。その他、計 2 か所において鉄の釘が検出されており、その釘には木質が付着している。更に、高さ 35cm ほどにわたって断面内に砂の多く含まれる部分があり、幅 90cm、高さ 35cm ほどの木樋状の構造物が存在していたと考えられる。断面観察の上からでは、この構造物の上に堤状の盛土を行っていたと考えられる。これらから、島を持つ段階が築造時



fig. 374 SX07 II-1期 落とし口遺物出土状況



fig. 375 SX07 II-1期 落とし口全景

fig. 376
SX07 I - 1期
平面図



fig. 377
SX07 II - 1期
平面図



のものと考えられるが、木柵状の構造物は築造時に伴うと考えられ、その後青灰色シルトの堆積が進行すると考えられ、これをもって築造時の時期を、2時期に小区分することが可能であると考えられる。なお、青灰色シルトの堆積が進行する段階では、木柵状の構造物は、埋没により、ほとんどその機能を終えていたものと考えられる。

第II期
1期 西側に石垣を築き、島を埋没させる段階である。この段階では、池内に大小の石を敷きつめている。石垣が築かれた段階では池の底にはシルト層が堆積しており、あまりきつい水流は無かったようである。この段階では落とし口付近に炭と共に多量の土師器が投棄されている。この土器群の下層では土師器皿が数枚重なった状態で出土しており、使用後の投棄とは考えにくい状態であった。上層の出土状況は、重なって出土したのではなく、使用後に一気に投棄したとも考えられる状況であった。これらの土器を含む土層が、シルト



fig. 378 SX07 I - 1期



fig. 379 SX07 II - 3期

層であることから、周辺からの流れ込みにより、集まつたとは考えにくく、出土状態から見ても、石垣の上から一括投棄されたものと考えられる。この段階をII期の小区分期のひとつとする。

なお、この段階か次の小区分期には、堤は、大きな石を張りつけて補強される様である。

2期 多量に土器が投棄されたのち、池内には砂の堆積が認められる。この段階には、落とし口も石で覆われる様になる。この頃には、SD14も石を張りつけた状態に変化する様である。土器もわずかではあるが出土している。これをもって次の小区分期とする。

3期 砂の堆積の上に多量の大小の石材を配する段階である。この段階では、石垣はほとんど埋没しており、落とし口の機能もわずかに残るのみである。堤の頂部から池底まで、最深部で60cmを測るのみとなる。

この遺構には多量の土器・瓦・礫などが投棄される。なかでも西側の石垣のきわでは、千に達するような数のかわらけ類が集中して出土しており、注意される。これをもって小区分期とする。II期は計3期の小区分期を持つ。土器の上からはほとんど時期差が認められないことから、II期は非常に短期間の内に細かく手を加えられていたことが窺われる。

第Ⅲ期 庭園遺構の山側にあたる北部に北西から南東方向、元来の等高線に沿う方向で大ぶりな石材を組んだ石垣が築かれる（平成6年度年報所収）。

また、調査区の南端でもチャート系の玉石を用いた洲浜が検出されている。この洲浜は石敷きや石垣を埋め込んで築かれている。これにより、池の景観としては、北に石垣、南に洲浜を持つだけで、池底には石は存在しないものと考えられる。また、一部に洲浜の下がった部分が認められるものの、落とし口の機能は既に失われていたと考えられる。

洲浜が最後に築かれた段階では、水は蓄えられた状態に変わったものと考えられる。SD14の検出面には足跡状の踏み込みが断面観察から確認されており、落とし口が機能を失った後は、短期間のうちに周辺は畠もしくは水田として利用されるようになっていたようである。

その後、近世にいたるまで、園地の南側の周辺は、畠もしくは水田として利用されていたようであり、早い段階に園地も土砂の流入により、埋没したものとみられる。

玉石を使った洲浜や大ぶりの石を使った石垣は平安時代末の園池の様相として通有なものであるが、池の底に石を敷くことや、小ぶりの石を石垣に用いることなどこの時期にみられない様相もあり、注意される。

池などから出土したこれらの土器の年代は、築造当初の「会所」内から出土したものと洲浜を埋める池の埋没土から出土したものも、12世紀後半のもので、この遺跡が庭園として機能していた時間幅は半世紀以内であったと推断される。

SD14 調査区北端で検出した、幅1.5m、深さ0.2mを測る溝である。

排水路 溝の方向は、北北西から南南東に方位を持つもので、旧の条里の方向に一致する。溝は上部を削平されるとみられるが、中央部分には丁寧に石を敷きつめている。これが上層である。下層では東側に石を溝底に少し敷きつめたもので、溝の壁面は当初ほぼ垂直に掘り下げられていたものとみられる。

この溝は、園地の落とし口に取りつくものである。

SX27・28 北西方向から南東方向に走る、幅約2m、深さ0.25mを測る溝状の遺構である。溝内部には、石材が充満していた。検出時点では、溝の南西部部分の肩に沿って多量の土師器皿が投棄された状態が窺われた。石材は暗渠状に充填されており、本来溝としての機能を果たしていたかは、疑問である。出土遺物としては、土師器皿のほか、鼎・瓦器塊・滑石製鍋・青瓷・軒平瓦などがある。

時期としては、出土遺物などから、12世紀第3四半期に相い前後するころと考えられる。

SX33 調査区南部に位置する、長さ2m、幅1m、深さ0.1mの長方形の土坑である。南西の短辺に沿って、遺物が出土している。

時期は、SX27と相い前後するころと考えられる。

SX34 調査区南部に位置する、3×4mの不整形の土坑である。土坑内部から多量の土器の細片が出土している。

時期は、SX27と相い前後するころと考えられる。

SD12 調査区中央に位置する幅40cm、深さ15cmの素掘の溝である。石垣1と方向が一致する。時期は、出土遺物等から石垣1とはば同時期のものとみられる。



fig. 380 石垣1



fig. 381 石垣2

石垣1 SX27の西に位置し、北西から南東に主軸をとる石積みである。ほとんどが最下段しか残っていないが、一部に2段となっている部分があり、上部に石積みがあったことが窺われる。

掘形は、SX27とは切り合い関係なく、出土遺物はほとんど出土していない。石垣の下面からは、SX27より一時期古相の遺物が出土しており、このことから石垣1はSX27とほぼ同時期か、やや遅れて築かれたものとみられる。但し、SX27・28との同時性については証明しきれない。

SX26 調査区中央に位置する、東西の流路状の遺構である。規模は、幅2m、深さ0.3mを測る。内部は礫と中砂から粗砂で埋没していた。時期は決定しがたいが、埋土がSX27等とは違うことや、わずかな出土遺物などから、室町時代の可能性がある。

石垣2 調査区南部に位置する幅3m、残存高0.4mを測る石垣である。北東から南西に主軸をとるが、石垣1とは直交関係にはならず、わずかに東に振っている。掘形からの出土遺物から、近世の石垣とみられ、周辺に近世の耕作痕がみられることから、水田または畑に伴うものと考えられる。

SX30 石垣2の南に位置する幅3m、長さ2m、深さ0.2mを測る落ち込みである。長さが、石垣2に対応することから、石垣2に伴うと考えられ、ほぼ石垣2と同時期のものとみられる。

3.まとめ

今回の調査は、先年度に引き続き、園池の調査を行い、落とし口とそれに伴う排水路を確認した。排水路については、先年度調査の導水路(SX16)とほぼ構造が一致している。

園池は、大きくは3期確認され、それぞれの小区分も合わせると6期存在する。これらはほぼ12世紀後半代のなかで行われたものと考えられる。また、洲浜を築く段階では、瓦などが多く含まれており、周辺に存在していたであろう瓦葺きの邸宅が、崩壊していたことを示しているものとみられる。おそらく、崩壊後まもなく洲浜をもつ最後の園池が築かれ、あらたな邸宅とともにしばらくは、機能していたと考えられるが、その機能が失われた段階から周辺部が水田もしくは畑へと変化していく状況は、この周辺が宅地ではなくなっていく状況として捉えることが出来る。

また、落とし口が、機能していたであろう段階の2時期にわたる園池の土層内からは、ほとんど瓦が出土していないことから、京都産の瓦などを葺いた建物が存在していた時期に機能していたものと考えられる。おそらく、建物と園池の築造は余り時期差はなかったと考えられるが、確認できていない。しかし、築造時の園池と次の段階の園池では、次の

段階の園池のほうが立派な作りと考えられ、しかも、瓦などを含まないことなどから、建物等はそのままにして、園池のみを作り替えた可能性が指摘される。

なお、この時期の園池は、東西 100 m ほどの規模を持つのが普通とされており、小さな園池であった可能性と共に、造り水である可能性も高いものと考えられる。

園池の築造が、3 時期存在するとして、土器としてはほとんど 1 型式内におさまるような様相からすれば、短時間のうちに、次々と作り変えられたものと考えられる。

また、調査区中央部で検出した石垣や SX27・28 ならびに 3 次調査の状況から、邸宅は単独ではなく、ある程度群をなしていたと考えられる。また、石垣 1 が、SD14 とほぼ方位が一致し、旧の条里の方向と一致することからみて、邸宅群がきわめて計画性のあるなかで築かれていたと考えられるのである。その邸宅群が 12 世紀末以後、衰退していくのである。

また、各所に、二次焼成をうけた瓦が出土しており、邸宅が火災により消失した可能性が指摘される。

そして、2 次調査で出土した京都産の瓦の存在を考えるならば、この邸宅群の主が、平家一門またはそれにかかわる人達である可能性が想定されるのである。

なお、今回の調査でも、明確な建物は検出できなかった。また、瓦などの出土も、2・3 次調査の量とくらべて明らかに違いがみられる。建物は、東に存在していたと、今回の調査成果からは想定せざるをえない。

今回の調査でも福原京当時の遺構が確認された。しかし、建物等の明確な状況は把握できていない。福原京を解明するためには、いましばらく周辺の地道な調査の継続が必要なようである。



fig. 382
調査地全景（南から）

4. 小坂砦・大橋山古墳群・坂本山墳墓群

1.はじめに

武庫川の支流である八多川と有野川とに挟まれた丘陵は八多町と有野町の境界であり、またその北端はこの2町と道場町との境界である。この3町にまたがる丘陵の先端付近は、これまで「小坂砦」として『神戸市埋蔵文化財分布図』に記載されていたが、遺跡の詳細は明らかでなかった。この丘陵で宅地造成の計画があがり分布調査を実施した結果、土塁と堀切によって画された平坦地や、古墳状隆起、および中世または近世墳墓と考えられる小マウンド群が確認された。今回は、この砦跡の範囲や性格を確認するとともに、他の遺構の所在を確認するために、試掘調査を実施した。調査は幅0.5～1.5mのトレンチを合計21本設定し、人力によって掘削した。

「小坂砦」の現況

現況の地形から観察される「小坂砦」の施設は以下のとおりである。標高205mの最高所に「平坦面1」がある。この平坦面の東側斜面標高200m付近には帯郭が存在する。最高所から尾根筋にそって北側斜面を約10m下った地点で「平坦面3」がある。この平坦面3と南から下ってきた斜面との傾斜変換点に、丘陵の東西両側の裾から堀切が1条と、その堀切の南側に東西両方の斜面に1条づつの豊堀が設けられている。堀切の北側の平坦面上と東側斜面には、堀底からの高さ約1.5～2.2mの土塁が長さ90mにわたって築かれてる。平坦面3では土塁から北に約40mに土塁と平行した高低差40cmの段が存在する。この段より南側はほぼ平坦であるが、北側は若干北に向かって下がっている。また段より北側の西側縁辺には、現況の高さ50cmの石塁が存在する。平坦面3の西側は切岸（きりぎし）が顕著で、平坦面から7～10m下った所に帯郭が存在する。尾根の幅が狭くなり平坦面が無くなる地点で東西両斜面共に2～3条の豊堀を設けている。これより北側は尾根上では顕著な防御施設は存在しないが、西側斜面には斜面中位に帯郭が存在する。



fig. 383
調査位置図
1 : 5,000

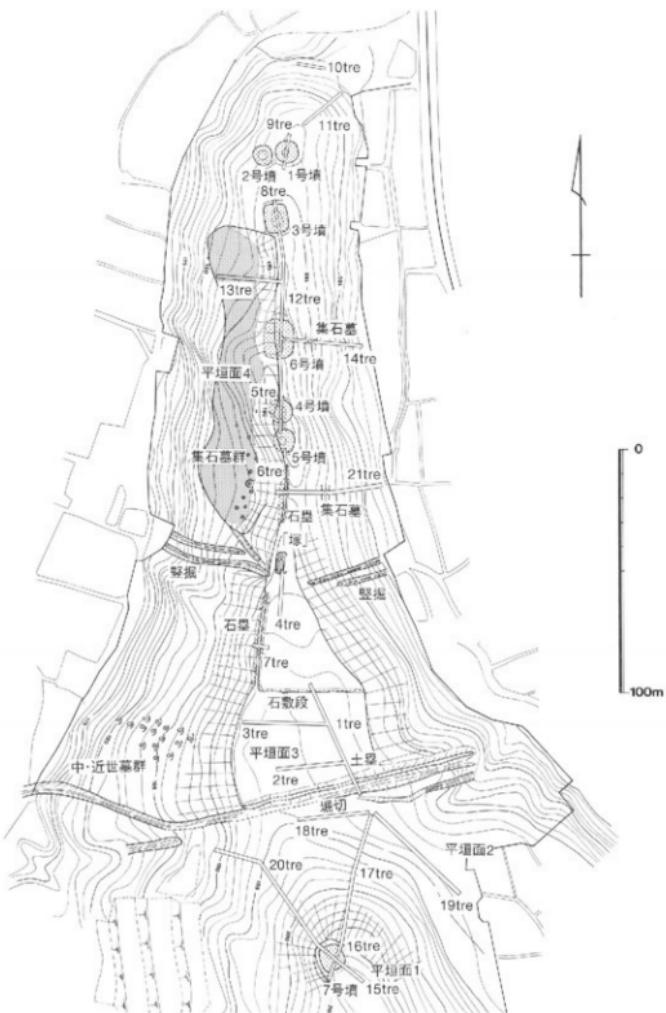


fig. 384
遺構平面図
1 : 2,000

2. 調査の概要 1～4・7トレーンチでは砦跡と考えられる「平坦面2」および土塁・堀切・石塁部分の調査を行った。先述した土塁と平行した段は平坦面2の東縁から西縁まで続いている。段の斜面には拳大から拳倍大の石が葺かれており、この段に続く平坦面西縁の石塁も同様の石を使用している。1・2トレーンチでは柱穴や建物の礎石と考えられる偏平な石が検出されたが、建物の規模などは今回の調査では、明らかではない。またこの「砦」に伴うと考えられる遺物は出土していない。

- 縄文時代早期** しかし1~4の各トレンチでは古墳時代・奈良時代・中世の須恵器の破片や縄文時代早期の神宮寺式・高山寺式の古式の押型文土器や石鏃が出土しており、これらの時期の遺構も存在する可能性が高い。
- 「塚」状マウンド** 平坦地2の先端で尾根が狭くなる地点には、南北7m、東西3m、高さ0.8mで周囲に幅1mの溝を巡らした「塚」状のマウンドが存在する。この「塚」状マウンドの表面には拳大から人頭大の石が積まれている。周溝から12世紀頃の須恵器片が出土していることから、中世の「経塚」の可能性がある。
- 中・近世** 平坦地2の西側斜面中腹の傾斜が緩やかなところに、直径2m前後、高さ30cm前後の小マウンドを持つ中世または近世の墳墓が、確認されたもので15基存在する。草木や落葉に隠れて確認できなかったものもあると考えられ、全部で20基前後は存在すると思われる。形状はいずれも山側を削って、その土で土盛りをしている。谷側の前面には拳大から拳倍大の石を直線的に並べており、マウンド上にも石を置いている。このうち1基の表土をトレンチ状に除去したがトレンチやマウンド付近からは遺物が出土していないため正確な時期は明らかでない。しかし、その形状から中世後期から近世前期にかけての埋葬と考えられる。
- 墳墓群** これらの墳墓は今回の調査ではじめて確認されたため、「坂本山墳墓群」と名付ける。
- 集石墓群** 丘陵西側の斜面中位には幅約20m、長さ約120mの平坦面（平坦面4）が存在する。この平坦面全域に腐食土直下で礫が広がっている。特に平坦面南半では直径1.0~1.5m、高さ20cmほどの礫の高まりが10数基確認され



fig. 386 「塚」状マウンド

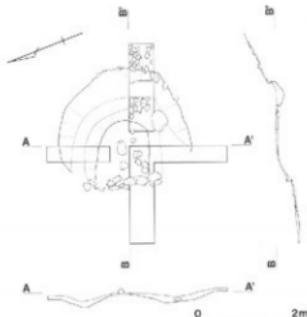


fig. 385 中・近世墓平面・断面図



fig. 387 「塚」平面図

る。また、この平坦面に設定した13トレンチでは礫の直上から中世の須恵器・土師器片が出土している。この礫群は中世から近世にかけての集石墓群と考えられる。

丘陵東側に設定した14トレンチ・21トレンチの斜面中位でも集石墓群が検出された。特に14トレンチで検出された集石からは、藏骨器と思われる土師器の鍋が出土している。遺物の時期は14世紀と考えられ、丘陵東側の二郎宮の前遺跡との関連がうかがえる。

斜面最下位においては幅3~5mの平坦面が存在する。この平坦面の埋め土からは多数の須恵器・土師器・瓦器などが出土している。遺物の時期は12~13世紀のもので、この平坦面は二郎宮の前遺跡で見つかっている屋敷地の一部と考えられる。

石塁 5号墳南側の21トレンチの尾根頂部西端においては腐食土直下より拳大の礫の集積が検出された。この集石は現状でも尾根の西側縁辺に沿って約10m続いていることが確認され、この集石列西側の斜面は急峻な切岸状を呈していることから、その南側に存在する「小坂砦」に伴う石塁の続きと考えられる。

「小坂砦」の土塁・堀切の南側に存在する平坦面（「平坦面2」）においては3本のトレンチを設定した（18・19トレンチと17トレンチの一部）。トレンチ内では顕著な遺構は確認されなかったが、中世の須恵器・土師器片が出土しており、付近になんらかの遺構が存在するものと思われる。調査対象地南端の最高所平坦面（「平坦面1」）から「平坦面3」にかけての斜面には2本のトレンチを設定した（17・20トレンチ）。20トレンチにおいて、遺構は確認されなかつたがその全域において古墳時代・奈良時代・中世の須恵器が出土している。17トレンチでは遺構・遺物は確認されなかつた。



fig. 388 石塁（7トレンチ）



fig. 389 集石塚（21トレンチ）

古墳状隆起 平坦面2より北側の尾根頂部では分布調査で計5基の古墳状隆起が確認されている。そのうち3基（1~3号墳）は尾根の北端にかたまっており、残る2基（4・5号墳）はそれより約100m南に並存している。今回、これらの古墳状隆起に関して試掘調査を行った結果、新たに2基が確認され、計7基の古墳が存在することが明らかになった。これらの古墳は今回その存在がはじめて確認されたので、「大橋山古墳群」と名付け、北から1号墳~7号墳とする。

1号墳 1号墳は直径10mの円墳で、丘陵先端の中央に立地する。平地からの比高差は約15mである。埋葬施設は木棺直葬と考えられる。南側に溝を巡らす。遺物は出土しておらず時期はあきらかでない。

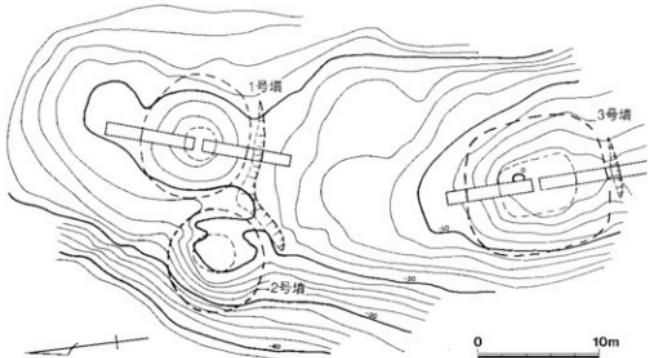


fig. 390
1～3号墳平面図

2号墳 2号墳は直径9mの円墳で、1号墳の西側に接して造られており、尾根の縁辺に位置する。埋葬施設は木棺直葬と考えられる。南から東側に溝を巡らしており、東側は1号墳の溝と共有するようである。調査をおこなっていないため詳細はあきらかでない。

3号墳 3号墳は一辺11mの方墳で、埋葬施設は木棺直葬と考えられる。墳頂部では幅1.5m（長さ不明）の埋葬施設の掘形と考えられる遺構プランが検出されている。南北両側に溝を切る。遺物は出土しておらず時期はあきらかでない。

4号墳 4号墳は直径9mの円墳で、埋葬施設は木棺直葬と考えられる。墳頂部では幅90cm（長さ不明）の埋葬施設の掘形と考えられる痕跡が検出されている。北側の溝底から布留式甕がおかれた状態で出土している。このことから4号墳は古墳時代前期（4世紀半ばから後半）の古墳であることが判明した。

5号墳 5号墳は直径8mの円墳で、埋葬施設は墳頂部を調査していないため明らかでない。ただし墳頂部から東にかけて盗掘坑と思われる落ち込みがあり小型の横穴式石室の可能性もある。北側の溝は4号墳の南溝と接して作られており共有はしていない。遺物は出土しておらず時期はあきらかでない。

6号墳 3号墳と4号墳の中間の地点で新たに1基の古墳が確認された（6号墳）。

6号墳は尾根の頂部に位置し、現状では南北17m、東西10mの長方墳もしくは椭円墳と考えられる。西側は後世に削られている可能性があり、東西方向の長さは12m程度であったと思われる。北側には溝を巡らせているが、南側は明らかではない。墳丘の裾付近から6世紀中頃の須恵器の坏片が出土している。埋葬施設は木棺直葬と考えられる。

7号墳 調査対象地南端の最高所「平坦面1」には2本のトレンチを設定した（15・16トレンチ）。両トレンチから溝状の遺構が検出され、またそれぞれ土師器が出土している。また、この地点では古墳時代の須恵器が数点採集されていることから、検出された溝は古墳の周溝と思われ、1辺約10mの方墳が後世に削平されたものと考えられる（7号墳）。

丘陵先端平坦地 丘陵先端の平坦地から多数の須恵器・土師器が採集されているためトレンチを設定して調査を行った。この地点は竹林になっており後世にかなり造作が加わっているようで、現地表下50cmは後世の盛土であった。その下に25cmの旧表土が存在し、その下は地山である。

今回の調査範囲内では遺構は確認されなかったが、地山直上から古墳時代から中世の須恵器が出土している。

石鏡 以上の遺構・遺物の他に、14・19トレンチでは縄文時代の石鏡が出土している。

3.まとめ 第1・第2次の試掘調査から合わせて明らかとなった点をまとめると以下の通りである。

1. 縄文時代の土器片や石鏡が出土しておりこの丘陵上に縄文時代の遺構が存在する可能性がある。

2. 古墳が7基確認された、遺物が出土していないものもあるため、すべての時期はあきらかでないが、4世紀後半から6世紀中頃までに造られたものと思われる。また「小坂砦」の郭である「平坦面3」においても6世紀前半の須恵器が出土しており、かつて古墳が存在した可能性がある。

3. 奈良時代の須恵器片が各トレンチで出土しており、この時期の墓址等の存在の可能性がある。

4. 中世から近世にかけての墳墓群が確認された。特に西側の斜面中位の平坦面では全面に礫が広がっており、かなりの数の墳墓が存在するものと思われる。中世から近世にかけての墓制を知る上で重要である。

5. 東側斜面の下位では平坦面が存在し中世の遺物も多数出土した。この平坦面は丘陵東裾に存在する「二郎宮の前遺跡」で見つかっている屋敷地の続きと考えられる。

6. 平坦面3からは中世の須恵器も多く出土しており、また同時期の「塚」状のマウンドも存在する。このマウンドは経塚ないしは「村」の境界を示す「塚」の可能性がある。

7. 「小坂砦」に関しては平坦面・堀切・竪堀・切岸・土壘・石壠等の防衛施設を備えた、いわゆる小規模城館である。その性格は、一時的な戦闘状態における「砦」的なものと思われるが、その詳細は今後の調査結果に委ねたい。

以上の調査結果より、今回の調査でこの丘陵上で新たに確認された遺跡を「小坂遺跡」とする。



fig. 391 調査地遠景

5. 上小名田遺跡 第15次調査

1. はじめに

上小名田遺跡は八多川中流域に位置しており、川の両岸に広がる沖積地および河岸段丘上に立地している。上小名田遺跡はこれまでの調査で平安時代～鎌倉時代を中心とした掘立柱建物、土坑、溝、流路（旧河川）などの多くの遺構が検出されており、付近における中心的な集落として解されている。八多川流域にはその他、附物遺跡、吉尾遺跡、下小名田遺跡、中遺跡、日下部遺跡などの集落遺跡が連続と営まれている。

調査は重機により耕土、床土を除去した後、人力により遺物包含層である灰褐色粘質土（淡灰色粘質土）を掘削、黄灰色粘質土上面（地山）で遺構確認調査を実施した。調査区は北からⅠ～Ⅴ区とした。

Ⅰ区では掘立柱建物8棟、土坑11基、溝23条、落ち込み1基、柱穴群を、Ⅱ区では掘立柱建物7棟、土坑5基、溝12条、落ち込み2基、柱穴群を検出した。Ⅲ区では谷状の地形が確認された。Ⅳ区では、平安時代末～鎌倉時代初頭頃の溝2条・土坑2基・ピット2か所のほか、自然流路・水田跡を検出している。Ⅴ区では、平安時代末～鎌倉時代初頭頃の溝3条、土坑1基、ピット3か所のほか、水田跡を検出している。この水田跡はⅣ区の東側で検出された水田跡に続くものと考えられる。



fig. 392
調査地位置図
1 : 2,500

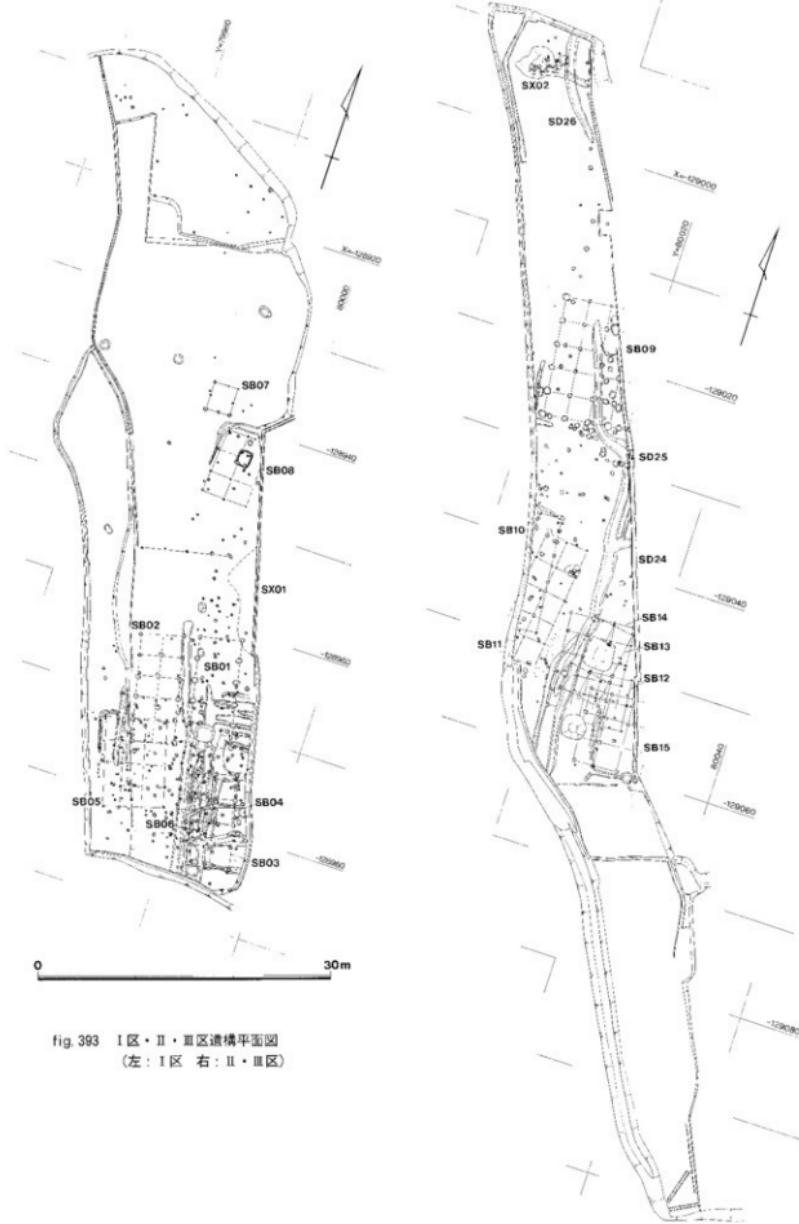


fig. 393 I区・II・III区遺構平面図
(左: I区 右: II・III区)

- 2. 調査の概要**
- I 区 I区は東西20m、南北80mの調査区で、南西方向からのびる丘陵の先端に位置しており、西から東へ緩やかに傾斜している。遺構は調査区南半に集中しており、北側は希薄である。以下、主な遺構の概要について記す。
- SB01 東西2間×南北5間、柱穴径50~60cm、柱間2.3mの掘立柱建物である。南、北それぞれ梁間の中間にのみ柱穴が存在しており、東西2間となる。
- SB02 東西2間×南北5間、柱穴径40~50cm、柱間2.4mの掘立柱建物である。中軸上の柱穴は所々存在しない。
- SB03 東西2間×南北4間、柱穴径40~50cm、柱間2.4mを測る総柱の掘立柱建物である。
- SB04 東西2間×南北2間、柱穴径30cm、柱間2.4mを測る総柱の掘立柱建物である。
- SB05 東西3間×南北4間、柱穴径20~30cm、柱間2.0~2.4mの総柱の掘立柱建物である。
- SB06 東西2間×南北2間、柱穴径20cm、柱間1.6~1.8mを測る総柱の掘立柱建物である。
- SB07 東西2間×南北2間、柱穴径20~40cm、柱間2.6mの掘立柱建物である。
- SB08 東西2間×南北3間、柱穴径20~40cm、柱間2.2mの掘立柱建物である。北側から北西隅部にかけて溝が巡っている。溝は幅40cm、深さ20cmである。また建物の内部に方形に巡る溝があり、幅20cm、深さ10cmを測る。溝の埋土は大半が炭で、周辺でも焼土塊や炭の広がりが認められており、鉄滓が出土している。小鍛冶などの工房跡と考えられる。

土 坑 I区では土坑が11基確認された。それぞれの規模を以下の表に示す。

	長径 (m)	短径 (m)	深さ (m)
SK01	1.0	0.8	0.1
SK02	0.8	0.6	0.1
SK03	1.4	1.2	0.2
SK04	2.0	2.0	0.3
SK05	1.4	1.2	0.2
SK06	1.0	1.0	0.4
SK07	1.4	1.2	0.2
SK08	1.0	0.6	0.1
SK09	1.0	0.6	0.4
SK10	1.4	1.0	0.4
SK11	1.0	1.0	0.5

この中で SK03・04・05 からは須恵器の塊や焼石が出土している。



fig. 394 I区全景



fig. 395 I区 SB05

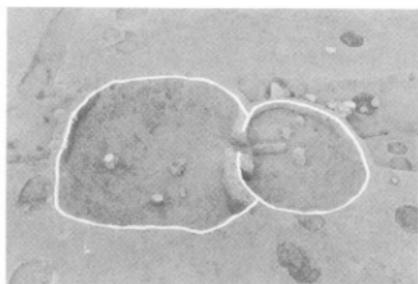


fig. 396 SK03・04



fig. 397 I区 SX01

溝 溝は22条検出された。南北方向にSD04・05・06など幅1m前後、深さ20cmのやや幅の広い溝があり、これらの溝に並行、あるいは直交する溝が検出されている。幅は30~80cmで深さ10cm前後の浅い溝である。切り合いはあるものの前後関係については明らかでない。用途は現在のところ不明であるが、区画溝や畑の痕跡などが考えられる。

SX01 調査区中央部の東端で検出された南北6m、東西2mにわたる落ち込みである。最深部で検出面から1mを測る。埋土は灰色~暗灰色シルト層で、遺物は底部に近い部分から出土している。須恵器、土師器、木片などが出土しており、須恵器には「西丘(にしおか?)」と書かれた墨書き器がある。西方の谷から水を引込み、溜めた場所と考えられる。またSX01の北側で柵列と考えられる柱穴が5個確認されており、屋敷地の北端にあたるものと思われる。

II区 II区は生活道路を挟んでI区の南側にあり、東西10m、南北80mの調査区である。またIII区はII区に続く東西10m、南北30mの調査区である。II区ではほぼ全域にわたり遺構が確認され、III区では谷状の地形が確認された。以下、II・III区で検出された遺構について説明する。

SB09 東西4間×南北5間、柱穴径50~60cm、柱間2.3mの総柱の掘立柱建物である。柱穴の深さは約80cmですべて柱は抜き取られている。土師器の小片の他に縄目陶器の破片が数点出土している。

SB10 東西1間×南北5間、柱穴径40~50cm、柱間2.4mの掘立柱建物である。

SB11 東西2間×南北5間、柱穴径40~50cm、柱間2.4mの掘立柱建物に復元できるが、所々で柱が確認されなかった。

SB12 東西2間×南北2間、柱穴径30cm、柱間2.4mの総柱の掘立柱建物である。

SB13 東西2間×南北3間、柱穴径20~30cm、柱間2.0~2.4mの総柱の掘立柱建物である。

SB14 東西3間×南北5間、柱穴径20cm、柱間1.6~1.8mの総柱の掘立柱建物である。柱穴から柱根や礎板が出土している。

SB15 東西3間×南北3間、柱穴径20~40cm、柱間2.6mの総柱の掘立柱建物である。

II区の柱穴には柱根の遺存するものが多く認められたが、柱が抜き取られた後に土器や石を投棄した状況も確認されている。同一の建物内でも両者が存在しており、どのような意味を持つのか興味深い。

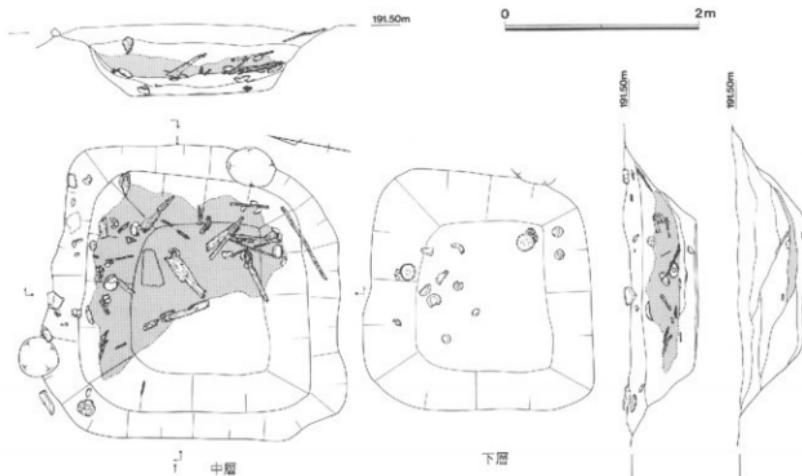


fig. 398 II区 SK13 平面・断面図

土 坑 土坑は6基検出された。SK12・13など水溜めと考えられる土坑や焼石が出土したものがある。

SK12 南北2.8m×東西2.4mの隅円方形の土坑である。深さは80cmで埋土は灰色～暗灰色シルトである。須恵器、土師器、木片、焼石が出土した。

SK13 南北2.8m×東西3mの方形の土坑である。埋土は暗灰色シルトであるが、中層に植物遺体、加工木材片、箸などの木製品の堆積層がある。須恵器、土師器のほか、銀、木鍤、箸、柄、加工材（板材）などの木製品が出土した。

SK15 径1.6mの円形の土坑である。深さ10cmで浅い皿状の土坑である。焼石が出土した。

SK16 調査区北で検出された土坑である。径約1m、深さ10cmを測る。東辺はSD26と接しており、境に拳大の石を並べている。後述する SX02・SD26と一連の施設と考えられる。



fig. 399 II区 SK13



fig. 400 II区 SK16, SX02

溝 検出された溝の規模は以下の通りである。

	幅 (m)	深さ (m)
SD23	1.2	0.1
SD24	1.0	0.2
SD25	0.6	0.1
SD26	1.0	0.1
SD27	0.4	0.1
SD28	0.3	0.1

	幅 (m)	深さ (m)
SD29	0.3	0.1
SD30	0.3	0.1
SD31	0.7	0.1
SD32	0.4	0.1
SD33	0.8	0.4
SD34	0.4	0.1

SD23・24・25・26は南北方向の溝で一連のものと考えられるが、途中3か所で東にのびる部分が確認されており、切り合い関係から4条の溝とした。屋敷地を画する区画溝と考えられ、多数の須恵器、土師器のほか、瓦器片、拳大の礫、木片なども出土している。

またSD28・29はSB09に、SD30はSB10にそれぞれ伴う雨落ち溝の可能性がある。遺物は土器の小片が出土した程度である。

SX02 SX02は長軸長7.5m、短軸長3.5mの土坑で、最深部の深さは検出面から70cmを測る。西側の谷から水を引き込み、溜めるための施設と考えられる。中央が径2mの土坑状となっており、一段高い部分は作業場として機能したものと思われる。須恵器、土師器のほか、柄杓、曲物底板、加工木片などが出土している。またSX02に接してSD26・SK16があり、溜められた水をSK16の石組みで濾過した後、SD26に流したものと思われる。

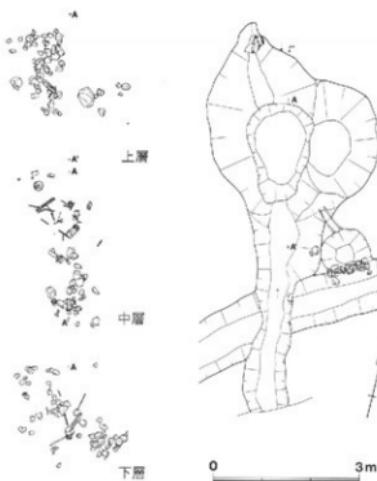


fig. 401 II 区 SX02 平面図および遺物出土状況平面図



fig. 402 II 区 SX02-SK16・SD26



fig. 403 SX02 遺物出土状況

III 区

III区では谷状の地形が確認された。谷の埋土は灰色、暗灰色のシルト層で、III区の中央部分で水みち状に最も深くなる。最深部の深さは検出面から1.5mを測る。II区に近い谷の落ち際の部分で奈良時代後半の遺物が多数出土しており、II区の遺構は谷が埋没した後に形成されている。谷の北側上がり口付近、II区の遺構の集中部分付近に平安時代末～鎌倉時代以前の遺構が存在した可能性を示すものといえる。

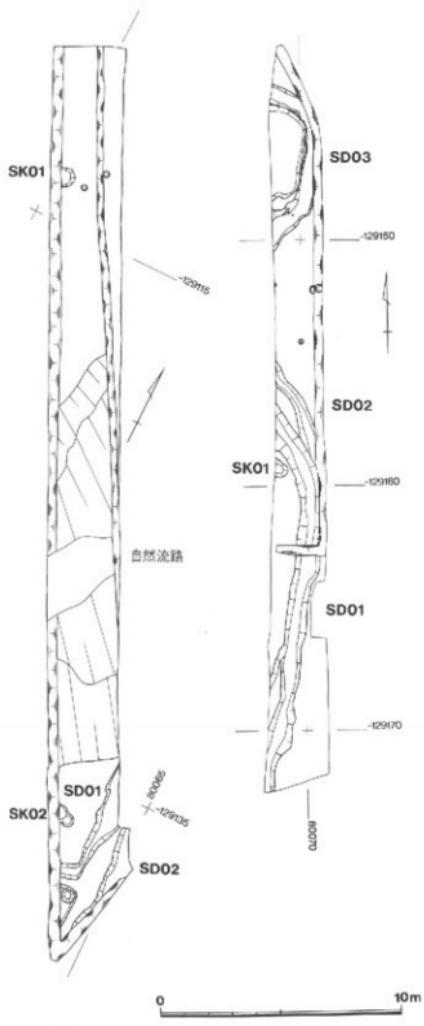
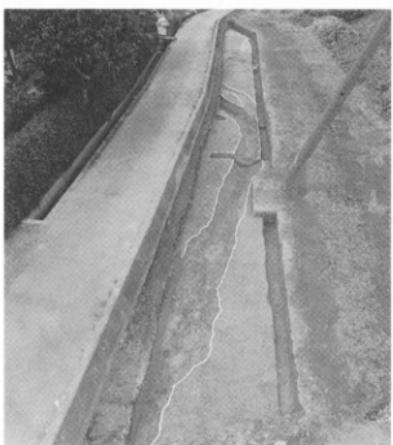
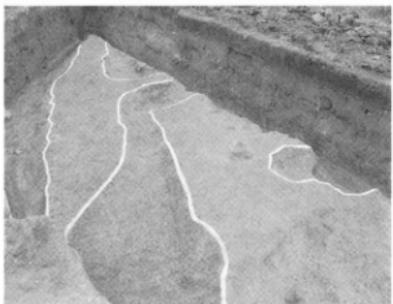


fig. 404 (右) IV区・V区造構平面図 (左: IV区 右: V区)

fig. 405 (左上) IV区全景

fig. 406 (左中) IV区南部検出造構

fig. 407 (左下) V区全景

- IV 区 調査区の南側で検出された北東から南西方向にのびる溝である。幅26~112cm、深さ5~16cmである。
SD01 埋土内より、須恵器・土師器が出土している。
- SD02 調査区の南側で検出された北東から南西方向にのびる溝である。幅64cm以上、深さ5~16cmである。
埋土内より、須恵器・土師器が出土している。
- SK01 調査区の北側で検出された楕円形の土坑である。西側は調査区外にひろがっている。直径80×60cm以上、深さ14~17cmである。
埋土内より、須恵器・土師器が出土している。
- SK02 調査区の南側で検出された楕円形の土坑である。西側は調査区外にひろがっている。直径55×80cm以上、深さ10~25cmである。
埋土内より、須恵器・土師器が出土している。
- 自然流路 調査区のほぼ中央付近で検出された東西方向にのびる自然流路である。東側および西側とも調査区外にのびており、幅14.9~16.6m、深さ1.07~1.32mである。
埋土内より、墨書き土器（須恵器塊）が1点出土している。
- V 区 調査区の南側から中央付近にかけて検出された南から北西にのびる溝である。SD02と重複しており、前後関係は、SD02→01であると考えられる。幅0.7~1.2m、深さ22~40cmである。
埋土内より、須恵器・土師器が出土している。
- SD02 調査区のほぼ中央付近で検出された南東から北西にのびる溝である。南側はSD01に切られている。幅0.5~0.7m、深さ7~12cmである。
埋土内より、須恵器・土師器が出土している。
- SD03 調査区の北側で検出されたコの字形をした溝である。西側は調査区外にのびている。幅0.7~1.7m、深さ10~20cmである。
埋土内より、須恵器・土師器が出土している。
- SK01 調査区のほぼ中央付近で検出された楕円形の土坑である。西側は調査区外にひろがっている。直径75×50cm以上、深さ18~20cmである。
埋土内より、須恵器・土師器が出土している。
- 遺物 遺物は28L入りコンテナで50箱分出土しており、谷部の遺物を除き、大半が12世紀後半から13世紀のものである。須恵器・土師器・瓦器・白磁のほかに柄杓・曲物・木鏺・箸・加工木材などの木製品が出土している。
- 3.まとめ 今回の調査では八多川左岸の段丘上において平安時代末～鎌倉時代の掘立柱建物15棟をはじめ、木製品が多く出土した水溜め施設（土坑）4基が検出されるなど、上小名田遺跡の一端を窺い知る遺構が数多く検出され、集落の広がりが確認された。遺構は狭い範囲に集中しており、切り合い関係、建物の軸方向などから3時期ほどに分類が可能であろうが現時点では十分検討が行えておらず、詳細については不明である。I区のSX01から出土した須恵器に書かれた「西丘（にしおか？）」の墨書きは、今回の調査区東方に拡がる、今までの調査で検出された集落との関連性を示唆するものとして注目される。

6. よしお 遺跡 第2次調査

1. はじめに

吉尾遺跡は、附物川と吉尾川の合流点付近に位置している。八多川西岸に形成された標高196m前後の河岸段丘上に立地する、平安時代～江戸時代の集落跡である。

吉尾遺跡は、昭和54年度に、都市計画道路田尾寺線築造工事に伴う発掘調査（第1次調査）で確認され、平安時代の掘立柱建物2棟・井戸1基を検出した。

今回の調査は、八多地区土地改良事業に先立つ発掘調査で、630m²について実施した。

fig. 408
調査位置図
1 : 2,500



2. 調査の概要

平成5年4月に事業予定区域内において、試掘調査を実施した結果、中世の遺物・遺構が検出された。

平成5年12月に、工事影響範囲の1,192m²について発掘調査を開始した。調査区名は、I～IV区とし、調査区ごとに遺構名を付した。

平成7年1月17日、兵庫県南部地震が発生したため、I区、II区、III区の調査は終了していたが、IV区の遺構検出がほぼ完了した段階で、発掘調査が中断した。

平成7年4月より、発掘調査を再開し、IV区では、平安時代～鎌倉時代の掘立柱建物4棟・土坑3基・溝14条・杭列2か所・ピット114か所を検出した。

IV区は、バイブルайн敷設部分で、南北方向が幅5.5m×全長約60.0m、東西方向が幅5.5m×全長約55.0mのT字形をした調査区である。

SB01 調査区の中央付近で検出された南北5間以上×東西3間の総柱の掘立柱建物である。

掘立柱建物の西側・北側・東側にかけて、建物に付随すると考えられる溝(SD01・02・03・04)が検出された。おそらくSB01の雨落ち溝の可能性が高い。また、南東側で検出されたT字形を呈する溝(SD08)もSB01に付随すると考えられる。

- 各柱間距離は、2.0～2.6 mで、柱掘形の規模は、いずれも直径20～40cm前後で、柱穴の深さは20～40cmである。柱穴の前後関係から、少なくとも1回は建物の建て替えがあったと考えられる。柱穴内より須恵器・土師器が出土しており、鎌倉時代初頭と考えられる。
- SB02 SB01の南西方約7.5 mで検出された南北3間×東西2間以上の総柱の掘立柱建物である。SB01で検出された様な付随する溝は存在しない。各柱間距離は、2.2～2.9 mで、柱掘形の規模はいずれも直径25～60cm前後で、柱穴の深さは35～55cmである。柱穴内より、須恵器・土師器が出土している。出土遺物から見て、鎌倉時代初頭と考えられる。
- SB03 SB02の南方約1.0 mで検出された南北4間以上×東西3間の総柱の掘立柱建物である。SB01で検出された様な付随する溝は存在しない。各柱間距離は、2.1～2.8 mで、柱掘形の規模は、いずれも直径25～70cm前後で、柱掘形の規模はいずれも直径25～70cm前後で、柱穴の深さは20～50cmである。柱穴内より、須恵器・土師器が出土している。出土遺物から見て、鎌倉時代初頭と考えられる。
- SB04 調査区の南側で検出された南北1間以上×東西3間以上の総柱の掘立柱建物である。SB03と重複しているが、建物の前後関係は、現在のところ明らかでない。SB01で検出された様な付隨する溝は存在しない。各柱間距離は、2.1～2.3 mで、柱掘形の規模は、いずれも直径25～40cm前後で、柱穴の深さは30～45cmである。柱穴内より、須恵器・土師器が出土している。出土遺物から見て、鎌倉時代初頭と考えられる。



fig. 409 調査地全景（北から）



fig. 410 調査地全景（南から）

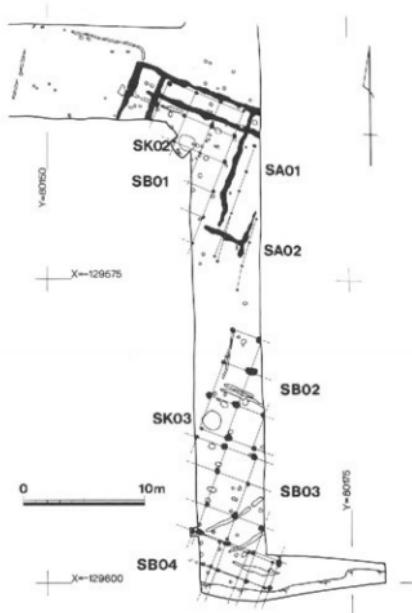


fig. 411 遺構平面図

遺構名	桁行×梁間	規模(m)	面積(m ²)	主軸方位
SB01	5間以上×3間	11.7×6.4	74.9以上	N19° 40' E
SB02	3間×2間以上	8.5×4.7	40.0以上	N11° 20' E
SB03	4間以上×3間	9.8×6.9	67.6以上	N16° 40' E
SB04	3間以上×1間以上	6.9×2.1	14.5以上	N20° 30' E

第1表：据立柱建物一覧表

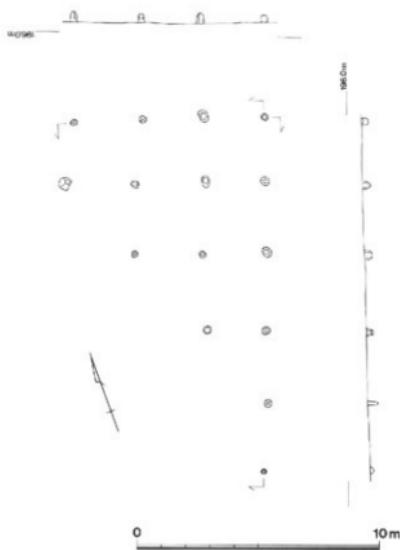


fig. 412 SB01 平面・断面図

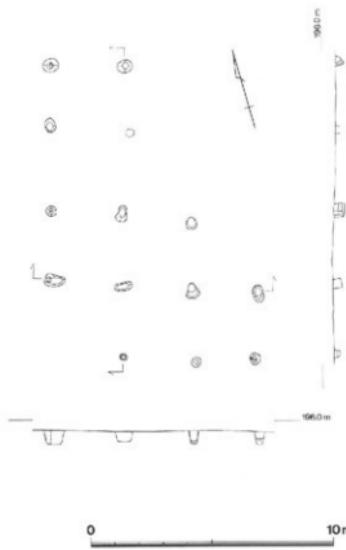


fig. 413 SB03 平面・断面図



fig. 414 SB01

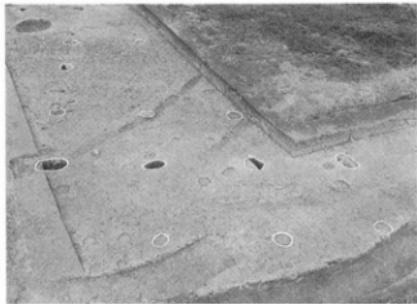


fig. 415 SB03



fig. 416 SB02

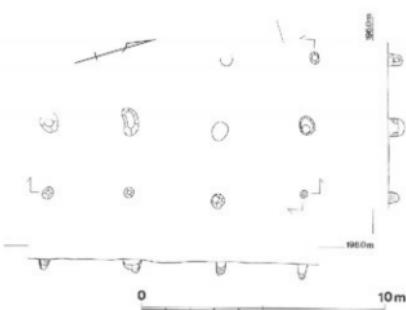


fig. 417 SB02 平面・断面図

SA01 調査区の中央付近で検出された5か所の柱穴で、SB01の東方約2.0mに位置している。1.7~2.1mの間隔でほぼ南北方向に一直線に並んでいるが、その東側および西側にこれに続く柱穴が検出されなかったため、柵列であると考えられる。また、北側および南側にも柱穴が検出されないため、4間の柵列である。主軸の方位は、N16°30' Eで、西方に位置するSB01とは若干異なっている。柱掘形の規模は、いずれも直徑15~25cm前後で、柱穴の深さは10~30cmである。柱穴の底は、いずれも先細りで杭状を呈している。

SA02 SA01の約2.0m東方で検出された4か所の柱穴で、2.0~2.1mの間隔でほぼ南北方向に一直線に並んでいるが、その東側および西側ともに続く柱穴が検出されなかったため、柵列であると考えられる。また、南側には柱穴が検出されなかったが、北側は調査区外へのびている可能性がある。主軸の方位は、SA01と同じN16°30' Eである。柱掘形の規模は、いずれも直徑15~20cm前後で、柱穴の深さは30~40cmである。柱穴の底は、SA01同様、いずれも先細りで杭状を呈している。

SA01・02とともに、埋土内から時期を確定できるような遺物は出土しなかった。

SK01 調査区の中央付近で検出された楕円形の土坑である。SA04のすぐ西側に位置している。長径88cm、短径58cm、深さ43~52cmである。埋土内より、11世紀後半~12世紀前半頃の須恵器・土師器が出土しており、SB01よりも古い時期のものであると考えられる。

SK02 SK01の東方約6.5mで検出された楕円形の土坑である。SB01のほぼ中央付近に位置しているが、建物との関連性は明らかでない。径130×120cm、深さ10~17cmである。埋土内より、須恵器・土師器が出土している。

SK03 調査区の南側で検出された楕円形の土坑である。SB02の南西隅に位置しているが、建物との関連性は明らかでない。径154×152cm、深さ23~35cmである。埋土内より、須恵器・土師器が出土している。

SD01~04・08は、調査区中央付近で検出されたSB01に付随すると考えられる溝である。

SD01 SB01の東側で検出された南北方向にのびる溝で、北側はSD04と繋がっており、南側は、SD08のすぐ北側で途切れている。現存長10.0m、幅20~48cm、深さ5~10cmである。埋土内より、須恵器・土師器が出土している。

- SD02 SB01 の北側で検出された東西方向にのびる溝で、東側で SD01 と交差した後、調査区外へのびている。西側は、SD03 と交差した後、SD04 のすぐ東側で途切れている。SD01 および SD03 との前後関係は、現在のところ明確でない。現存長 9.7 m、幅 20~54cm、深さ 5~16cm である。埋土内より、土師器が出土している。
- SD03 SB01 の西側で検出された南北方向にのびる溝で、北側は SD04 と繋がっており、南側で SD02 と交差した後、調査区外へのびている。現存長 3.8 m、幅 40~52cm、深さ 10~13 cm である。
- SD04 SB01 の西側から北側にかけて検出された L 字形を呈する溝である。南側および東側は調査区外へのびている。SD01 および SD03 と交差しているが、前後関係は、現在のところ明確でない。現存長は、東西方向が 10.8 m、南北方向が 5.2 m、幅 20~50cm、深さ 3 ~13cm である。
- SD08 SB01 の南東側で検出された T 字形を呈する溝である。現存長は、南北方向が 4.0 m、東西方向が 3.5 m、幅 13~55cm、深さ 2 ~4 cm である。
- SD05 調査区中央付近で検出された L 字形を呈する溝である。SB01 のすぐ北東方に位置しており、現存長 6.8 m、幅 16~22cm、深さ 2 ~8 cm である。
- SD06 調査区中央よりやや西側で検出された南北方向にのびる溝である。途中、2か所で途切れおり、北側は調査区外にのびている。幅 10~18cm、深さ 2 ~3 cm である。
- SD07 調査区中央付近で検出された東西方向にのびる溝である。SD02 のすぐ南方に位置しており、SD03 と交差しているが、前後関係は、現在のところ明確でない。
現存長 3.5 m、幅 16~28cm、深さ 4 ~10cm である。
- SD09 調査区南側で検出された南北方向にのびる溝である。SB02 の北東部付近に位置しているが、建物との関連性は明らかでない。現存長 3.8 m、幅 8 ~16cm、深さ 2 ~5 cm である。
- SD10 調査区南側で検出された東西方向にのびる溝である。SB02 の中央部付近に位置しているが、建物との関連性は明らかでない。現存長 2.6 m、幅 16~20cm、深さ 2 ~3 cm である。
- SD11 調査区南側で検出された東西方向にのびる溝である。SD10 すぐ南方に位置しており、東側は調査区外にのびている。現存長 3.8 m、幅 16~44cm、深さ 2 ~3 cm である。
- SD12 調査区南側で検出された南西から北東方向にのびる溝である。SB03 の北側付近に位置しているが、建物との関連性は明らかでない。現存長 5.3 m、幅 16~30cm、深さ 2 ~10cm である。
- SD13 調査区南側で検出された南西から北東方向にのびる溝である。SD12 の南東方 2.1 m に位置しており、東側は調査区外にのびている。現存長 3.3 m、幅 15~32cm、深さ 2 ~7 cm である。
- SD14 調査区南側で検出された東西方向にのびる溝である。SB04 の北側付近に位置しているが、建物との関連性は明らかでない。現存長 3.9 m、幅 20~48cm、深さ 2 ~7 cm である。

遺物の概要

遺構および遺物包含層より、平安時代末～鎌倉時代初頭・江戸時代頃の須恵器・土師器・瓦器・白磁・陶器などが、28ℓ コンテナで約 5 箱分出土している。
また、遺物包含層より、サヌカイト製の石匙が 1 点、石鏃が 2 点、剥片が数点出土している。

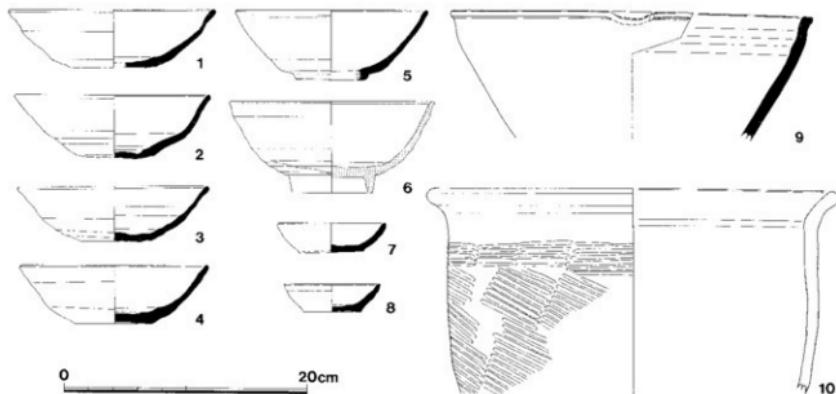


fig. 418 出土遺物実測図 (1・5 : SB04 2 : SP90 3・4・7・8・10 : SP77 6 : SP84 9 : 包含層)
(1～5・7～9 : 須恵器 6 : 白磁 10 : 土師器)

3.まとめ

今回の調査では、吉尾遺跡において、平安時代末～鎌倉時代初頭の集落跡が検出された。

IV区において、掘立柱建物は4棟検出された。時代はいずれも鎌倉時代初頭頃であると考えられる。主軸方位の相違から、少なくとも2～3時期に区分できると考えられる。

SB03と04は、重複しており、また、SB02と03も近接し過ぎていて、同時期に併存し難いが、現在のところ各々の建物の前後関係は明確でない。

また、SA01・02の柵列は、SB01とは主軸方位が異なっているため、SB01に伴うものである可能性は低いと考えられる。むしろ、SB03とはほぼ同じ主軸方位であるため、SB03と同時期である可能性が考えられる。

SB01の外側を取り巻く溝(SD01～04・08)はおそらく雨落ち溝である可能性が高い。

神戸市内における雨落ち溝の主な検出例としては、上小名田遺跡第2次調査のIX区・SB23・25・30・31をはじめ、宅原遺跡豊浦地区(平成2年度)のEトレンチ・掘立柱建物や宅原遺跡宮ノ元地区(平成3年度)のSB01、宅原遺跡岡下地区(昭和60年度)のSB01、上津遺跡(昭和60年度)のA地区・SB01などが挙げられるだろう。

これらの雨落ち溝の存在は、掘立柱建物の上屋構造を復原する際においても、貴重な資料となるであろう。

今までの発掘調査の結果、上小名田遺跡から吉尾遺跡において、平安時代後半～鎌倉時代初頭にかけて、数十棟の掘立柱建物が検出され、連綿と集落が営まれたことがわかつてきた。

同時期の遺物も多量に出土しており、今後はこれらの資料の分析・検討や周辺地域の発掘調査等により、しだいに当遺跡の全容・詳細が明らかになるであろう。

7. つもの 附物遺跡 第2次調査

1. はじめに

附物遺跡は神戸市北区八多町附物に所在する中世から近世にかけての集落遺跡である。平成2年度に市立八多小学校・中学校管理棟新築事業に伴う発掘調査が実施され、13世紀後半～14世紀代の掘立柱建物や近世の水溜めと考えられる土坑群など集落址の一端を示す遺構が確認されている。今回の調査地は第1次調査地の北東約300mに位置し、八多川右岸の河岸段丘上に立地する。この八多川流域には上流域に附物遺跡、中流域に上小名田遺跡・吉尾遺跡・下小名田遺跡、下流域に中遺跡・日下部遺跡などの平安時代後期～鎌倉時代を中心とする集落遺跡が存在する。また八多川左岸の地方主要道三木・三田線は古来より有馬・三田と三木を結ぶ主要な街道跡とされており、街道や河川に沿った平野部に連綿と集落が営まれた様子を窺い知ることができる。

今回の調査は圃場整備事業にかかる道路部分の調査で、現況の水田の形より便宜的にⅠ～Ⅲ区の調査区を設定した。調査は人力により包含層検出・掘削、遺構検出・掘削作業を行った。



fig. 419
調査地位位置図
1 : 2,500

2. 調査の概要

I 区

I区は現況で2段の圃場からなる。基本層序は上から耕土、盛土、暗灰色粘性砂質土(中世包含層)、黄褐色粘質土の地山である。地山は東に向かい緩やかに傾斜しており、東端で灰色砂質土、黃橙色粘質土の近世耕作土および盛土、下層に暗灰色粘質土～シルト、黃灰色細砂といった湿地状の堆積が見られる。東端では地山面と上層で近世の遺構面が確認されている。

調査区中央から東端で近世の溝・土坑・柱穴・井戸などが検出された。

SD01 調査区の中央で検出された溝である。T字状に検出されたが調査区外にのびるため全体については不明である。幅約1.0m、深さ約0.2mを測る。溝内には拳大の礫が詰まつておらず断面でみると礫の占める割合が高く、隙間に暗灰色シルトが流れ込んでいる。遺物は出土していないが、近世以降の暗渠と思われる。

SD02 調査区東で検出された。全体の形状については不明であるが、調査区内ではL字状に曲がる溝とそれに直角に交わる溝からなる。幅1.0m、深さ0.1mを測り、埋土は灰色粘性砂質土である。中から近世～近代の瓦片とわずかに陶磁器片が出土している。後述する土坑群と一連のものと考えられる。

SK01 調査区東隅で半分ほどが検出された径約1.0m、深さ0.3mの土坑である。土坑の底近くに径10cm、長さ約1.2mの木材を壁に沿って据えて、周間に人頭大の礫を詰めている。埋土は灰色粘質土・濁青灰色粘土で、水溜めと考えられる。中から近世の陶器片・瓦片の他に、長さ約15cmの半截した竹を合わせた箸箱（筒）と箸などの木製品が出土した。

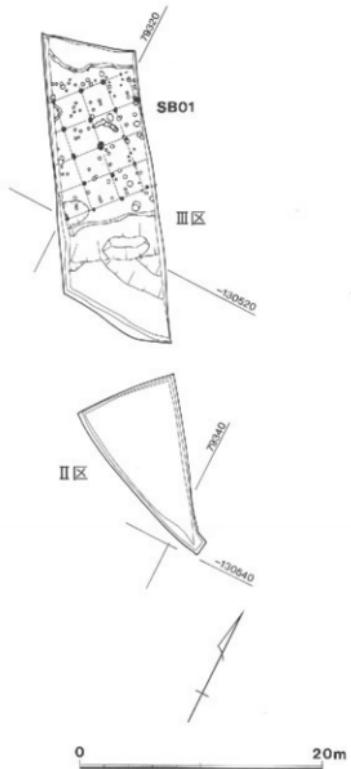


fig. 422 遺構平面図



fig. 420 I区全景



fig. 421 III区全景



- SK02 長径 2.2 m、短径 2.0 m、深さ 1.0 m を測る。下層の濁灰色粘土から瓦片・陶器片が出
土している。SK01 同様水溜めか、あるいは廐棄坑かと考えられる。
- SK03 径約 2.0 m、深さ 0.2 m の皿状の土坑である。埋土は灰色粘質土で瓦片が出土している。
これらの土坑は SD02 と繋がることにより一連の施設と考えられる。おそらくは水田に伴
う溝、水溜め、生活用の廐棄坑などであろう。
- SK04 長径 0.8 m、短径 0.6 m、深さ 0.2 m を測る。陶器片がわずかに出土している。
- SK05 長径 1.0 m、短径 0.8 m、深さ 0.3 m を測る。埋土は灰色粘性砂質土で若干炭が混じる
が遺物は出土していない。

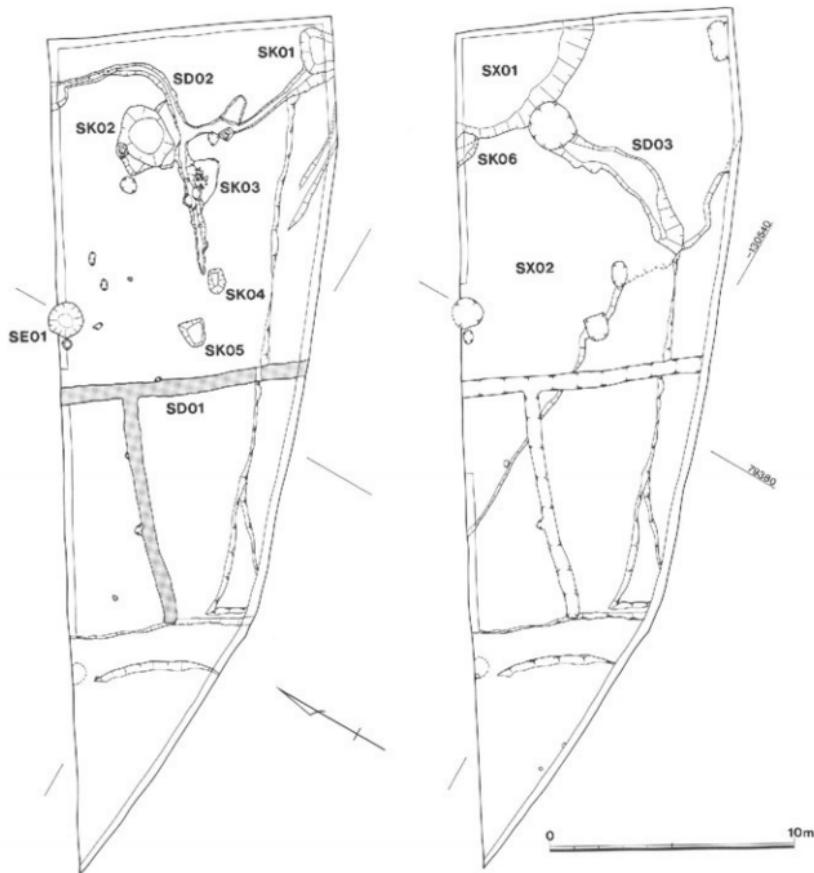


fig. 423 I 区遺構平面図（左：第1遺構面〈近世～近代面〉 右：第2遺構面〈中世〉）

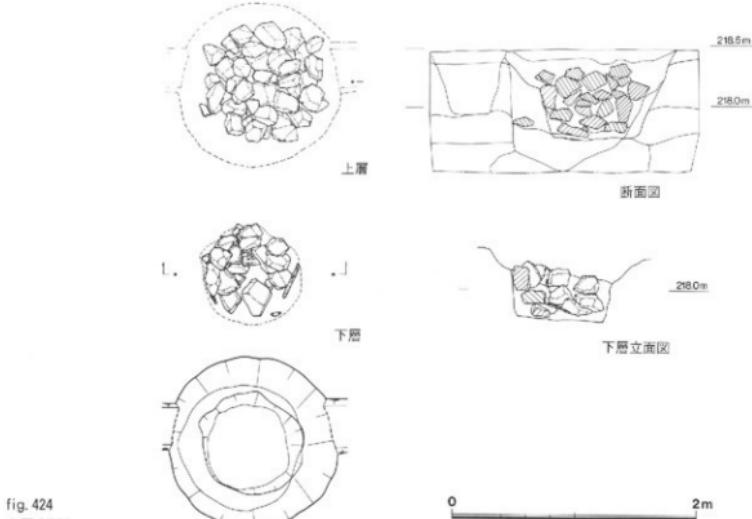


fig. 424
I 区 SE01
平面・断面図

SE01 調査区中央で検出された石組みの井戸である。掘形径約1.3m、深さ約0.8m、石組み内径約0.6mを測る円形の石組み井戸である。石組みは上部が崩れており、内部に崩落した石が詰まった状態で検出された。西側の下層の一部で原位置を留めていると思われる部分を確認した。中から近世の瓦片・陶磁器片、踏板状の木板のほかに竹筒が出土しており、井戸の廃棄を示すものと思われる。

中世面（黄褐色粘質土－地山面）

SD03 緩やかに傾斜する自然地形と方向を同じくする水みち状の痕跡である。幅2.0m、深さ約0.2m、埋土は黄白色砂質シルトである。遺物は出土していない。

SK06 落ち込みの端で検出されたが、大半は調査区外に存在するため規模は不明である。埋土に炭を含み、土師器片が出土している。

SX01・02 SX01は調査区北西隅で確認された谷状地形である。中世の須恵器・土師器が下層の暗灰色粘質土～シルト層から出土している。

SX02は調査区のほぼ中央で確認された浅い段である。この段より東側に暗灰色粘性砂質土（中世包含層）が堆積する。中世の水田に伴う段であろう。



fig. 425 SE01

II 区

II区の基本層序は上から順に耕土、灰色砂質土、灰色粘質土（旧耕作土）、黄褐色粘質土の地山で、一部地山面に暗灰色礫混じり粘質土が溜まり状に堆積する。灰色粘質土には炭片が混じるもの遺物は少なく、暗灰色礫混じり粘質土の遺物も少量である。暗灰色礫混じり粘質土の遺物は中世の土器片である。遺構は確認されなかった。

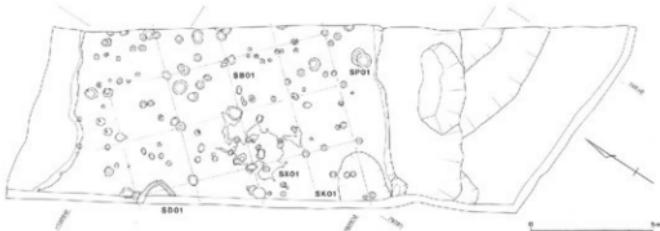


fig. 426

III区遺構平面図

III 区

III区は現況で2段の圃場面からなり、上段と下段の圃場の高低差は約2.0mである。段丘崖部にあたる。上段の圃場では耕土直下で黄白色粘質土の地山となるが、下段の調査区で暗灰色粘質土の中世包含層が良好に遺存する。地山面で柱穴・溝・土坑などを検出した。

SB01 南北4間以上×東西3間以上の掘立柱建物である。調査区外にのびるため全体の規模は不明である。建物を構成

する各々の柱は形態・規模が不定形であり、建物の廃絶に伴う柱の抜き取りにより形態が損なわれたものと考えられる。建物の時期は柱穴内の遺物より13世紀後半と考えられる。またその他建物を構成するには至らなかつたが、柱根の遺存するもの、土器を投棄したもの、柱の抜き取り後に小礫を詰めた柱穴が確認されている。

SD01 調査区内ではL字に折れて検出された。幅0.2m、深さは0.2mである。土師器片がわずかに出土している。

SK01 径2.0mほどの浅い皿状の落ち込みである。中から人頭大の礫が出土している。

SP01 径約0.6m、深さ約0.2mを測る。須恵器壺を投棄しており、炭・焼土が多く混じる。周辺で焼けた痕跡は認められない。壺は3個体分ほどあり、検出状況から土坑内に壺を据えた後に上から礫や同様の壺を叩きつけて割ったものと考えられる。

SX01 地山面で確認された用途不明の遺構である。幅10cmの溝が不規則に巡り、所々で柱穴状の一段深い落ち込みに繋がる。埋土は暗灰色粘質土で上層の包含層と同じである。断面の形態は下部が広くなる袋状を呈している。中から土器・陶磁器の他、鉄滓・炭粒子・石鍋が出土しているが、周辺で特に熱を受けた状況は確認されていない。遺構の性格については明らかでなく、木の根などの痕跡である可能性もあるが、建物構築時の整地に伴う痕跡と考えられないだろうか。



fig. 427 SB01

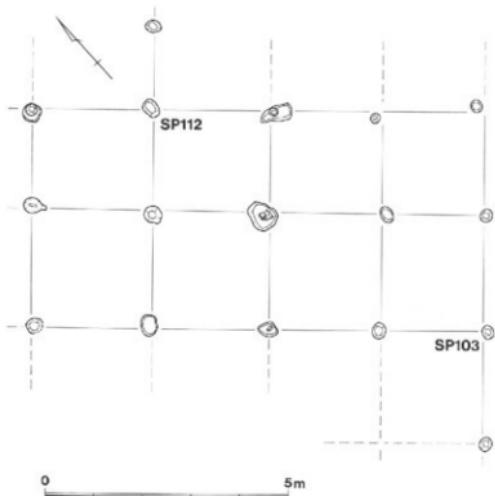


fig. 428 Ⅲ区 SB01 平面図

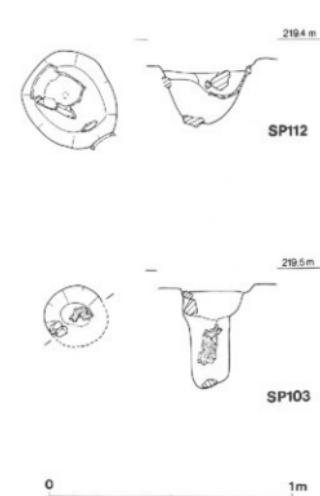


fig. 429 SB01 柱穴平面・断面図



fig. 430 SP112



fig. 431 SP01

3. まとめ

今回の調査では、調査範囲は限られていたものの、特にⅢ区において多数の柱穴が検出されたことおよび附物遺跡において大型の建物が確認されたことは、付近一帯の集落の様相を知る上で足掛かりを示したといえる。また八多川流域での集落の拡がりを検討する上でも重要であり、中世以降の土地開発の状況や背景などを知る上で貴重である。特に附物遺跡周辺においては、鎌倉時代創建と伝えられる奥藏寺がかつて存在したことや現存する極楽寺の創建年代、現在でも付近で寺院に係わる字名が散見されることは非常に興味深いものである。

8. 屏風遺跡 第9次調査

1. はじめに

八多町屏風は三田から淡河を通り三木に抜ける街道筋に所在し、また加古川流域と武庫川流域の分水嶺があり、旧攝津国と旧播磨国との境界にあたる重要な地域である。

屏風遺跡ではこれまでに8次にわたる調査が行われており、これまでに縄文時代の石器や中世後半から末の掘立柱建物や墓塚などが見つかっている。今回の調査は現況道路の付け替えに伴って実施するものである。

調査対象地付近の地形は北東から南西の屏風川に向かって下がっており、水田は棚田になっている。調査地は最近まで家屋があったところであり東半の旧地形はかなり削平されている。西半は近世までの水田を埋めて宅地を造成している。



2. 調査の概要

基本層序

西半の基本層序は上から現代の盛土・灰茶色シルト・淡茶灰色シルト・淡灰色シルト・淡明灰色シルト・明灰色シルト・黄褐色シルト質粘土（遺構面）となる。灰茶色シルトから明灰色シルトまでは近世の水田耕作土である。

遺構

遺構は先記したように、東半は削平を受けて遺構は残存しない。西半では掘立柱建物1棟(SB01)、土坑1基(SK01)、溝4条、ピットなどを検出した。



fig. 433 調査地全景

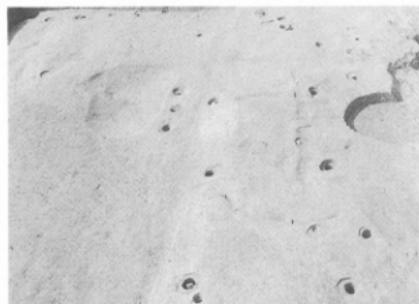


fig. 434 SB01・SK01

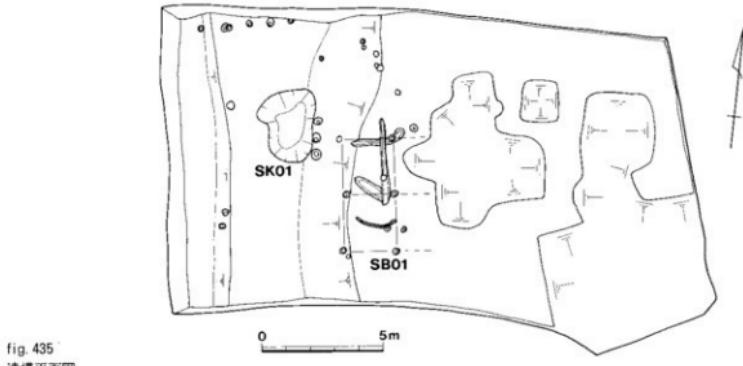


fig. 435
遺構平面図

SB01 検出されたのは掘立柱建物 2間×1間分のみであるが、東側は削平されているため、本来は東側にのびる可能性がある。建物の規模は南北 4.6 m、東西 2.2 m である。柱間は南北方向が 2.25 m、東西方向は 2.15 ~ 2.20 m を測る。柱穴掘形の直径は 30 cm、柱痕の直径は 15 ~ 20 cm を測る。北東隅の柱穴から土師器の羽釜が出土している。

SK01 SB01 北西コーナーの西側に存在する土坑である。長径 3 m、短径 2 m の楕円形で、深さ 20 cm を測る。東辺に 60 cm 間隔でピットが 3 個並ぶ。住居の前の水溜めと考えられる。

調査区の北西隅では 6 個のピットが 1 列に並んでいる。調査区外にのびる掘立柱建物の可能性がある。

調査区南西隅のピット SP01 からは須恵器塊と鉢が出土している。

遺構内や遺物包含層の出土遺物から、遺構の時期は 13世紀前半と考えられる。

遺 物 遺物は土坑・ピット内から須恵器塊、土師器小皿の小片が出土しており、遺物包含層からは須恵器、土師器片のほかに白磁片が出土している。

3.まとめ 今回の調査では掘立柱建物が 1 棟確認され、中世の集落の一端が確認された。屏風遺跡ではこれまでにも、掘立柱建物や墓址がみつかっており、当地域の中世における集落像が序々に明らかになりつつある。

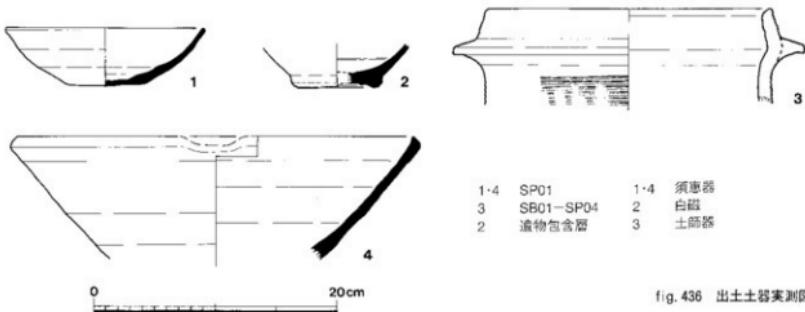


fig. 436 出土土器実測図

9. 茶臼山城址

1. はじめに

茶臼山城は上津城とも呼ばれ、今からおよそ400年前の室町時代に、この付近を支配していた有馬氏の一族が、この城を築いたといわれている。その後、1579年（天正7年）に織田信長の命令を受けた羽柴秀吉の中国地方攻略に際して攻撃を受け、落城したと伝えられている。

茶臼山城の構造

城は、北向きの丘陵先端に本丸とやや下った位置にそれを取り巻く二の丸を配し、南側の尾根には南丸を設け、平坦面を造成している。それぞれの郭（くるわ・陣地のこと）周辺には、堀切（ほりきり・敵の進入を防ぐため、尾根に直交して堀を設けたもの）や土塁（矢や銃弾、敵の進入を防ぐ土盛りの塹）を造り、敵の侵入を困難にしている。

立地

この城は、長尾川と善入川の合流点南側の丘陵先端部にあり、長尾川流域の平野部が眺望できる良好な位置にある。長尾川を遡れば吉川・東条方面に通じ、下れば有馬・三田方面の道に繋がる。また善入川を遡れば、大沢を経て淡河・三木方面の道に達するという交通の要衝を見下ろす場所を選んで築城している。つまり、いったん事が起これば、いずれの方面からの敵の進入もいち早く察知し、防戦できる場所を選んでいる。



fig. 437
調査地位図
1 : 5,000

当城址は、兵庫県、住宅都市整備公団等が推進する「神戸三田国際公園都市」の一つである、神戸リサーチパーク（北神戸第2地区）の一角に位置し、城址の大半は保存範囲とされている。なお当城址は、ニュータウン開発計画時の分布調査により、北神ニュータウン内遺跡No.20, 21地点という番号で呼称されているが、以下、茶臼山城址に統一する。

昭和61年に試掘調査を行い、本丸で基壇を持つ礎石建ちの建物跡を検出し、南丸で堀を確認した。さらに南にのびる尾根上に試掘トレンチを設定したが、山城の範囲は明確でなかった。

平成5年に、南丸とその南に続く尾根の再試掘調査を行い、南丸の南側にある尾根上でピット、土坑が検出される地区を出丸と推定した。また、それを結ぶ土橋状遺構（どばしじょういくこう・敵の進入を防ぐため、尾根道を細く削り込んだもの）を確認し、遺跡の範囲を確定したが、当初の予想よりも広い範囲で遺跡が拡がることが判明した。

これに基づき、神戸市土木局に対し城跡全域の保存を要望し協議を行ったが、出丸と想定される地区および出丸と南丸を結ぶ土橋状遺構については、保存することが困難という結論に達し、造成により削られる部分の発掘調査を実施した。

また保存予定の地区についても、遺跡公園として整備、活用するために、基本データを得る必要があり、遺跡の範囲、性格、配置状況、時期などを確認する調査を実施した。

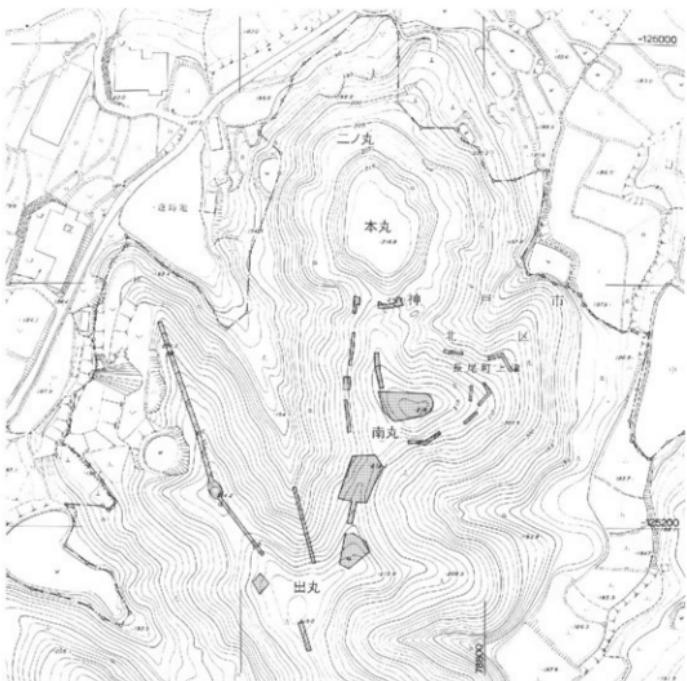


fig.438
トレンチ配置図
1 : 2,000

2. 調査の概要 今年度は、土橋状遺構、出丸周辺、南丸とその周辺、二ノ丸の一部の調査を行った。

①土橋状遺構 出丸（No21-3）と南丸（No21）を結ぶ尾根筋にある土橋状遺構付近の調査を行った。この部分は、両側が急峻な南北方向斜面であり、その細い尾根筋の頂部を更に削って幅約1mの狭い尾根道を造っている。造作を行っている範囲は約15mである。南丸からは、幅約2mの堀切を隔てた部分にあたる。また、南丸南西端から、土橋状遺構南端までは45~50mの距離がある。

南丸を攻める側は、土橋状遺構を一列縦隊で渡らねばならず、その間に南丸を守る側は、弓または鉄砲で一人ずつ狙い撃ちできるようになっている。

②出丸周辺 出丸と想定される地区（No21-3）周辺の尾根に試掘トレチを設定した。平成5年度の調査で、遺構・遺物が確認された周辺には、やや広い調査区を設定した。調査の結果、遺構・遺物

は発見されず、出丸と想定される地区には前回の調査で確認されたように、尾根の頂部と斜面にピットと土坑が散在し、明確な城構えを形成していない。

③南丸 南丸は頂部が約216mの平坦面となっており、その部分の遺構確認調査を行った。

平坦面では、約5~10cm程の表土層を除去すれば、遺構検出面となっている。なお、平成5年の調査で、丘陵の頂部を削平して斜面に盛土し、平坦面を拡げていることが判明している。

掘立柱建物 南丸平坦面では、ピット（柱穴）、土坑を検出した。ピットは調査区全体から発見されたが、西半部に比較的多い。縁辺部には部分的にピットが並ぶ所があるが、空白の部分も多く、柵等の造り付けられた防御物が平坦面を取り囲んでいたとは考えられない。

また、それらを図上でつないでいくと掘立柱建物（地面に穴を掘り柱を埋め込んで立てる建物）が確認された。この建物は2×2間の不等間の建物であり、建物規模は大きくはない。建物のすぐ脇には、後述の土坑（SK01）が掘られている。

なお、ピット（柱穴）は、当遺跡が保存対象地域にあたるため、平面プラン確認に止め、断ち割りは行っていない。

土 坑 径2.3~2.7m、深さ30cmの不整円形の土坑で、埋土内には細かい炭片が混入していた。（SK01）また、埋土内からは砥石や美濃製と考えられる天目茶碗が出土した。建物に伴うか、あるいは、廃絶時に掘られた穴と判断される。

五輪塔 東半部では、平坦面を造作する際に埋め込んだと考えられる一石五輪塔の破片が出土した。火輪と水輪の部分が縦にはば半分に切断された状態で発見された。故意に割られたか、自然に剥離したかは不明である。石質は付近に露頭している凝灰質砂岩である。

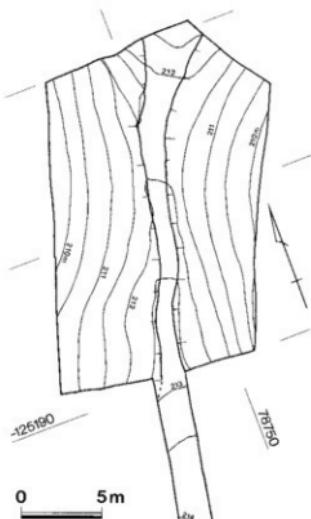


fig. 439 土橋状遺構平面図



fig. 440
南丸遺構平面図



fig. 441 土壇状遺構



fig. 442 南丸全景

④南丸周辺　　南丸と本丸をつなぐ尾根には腰曲輪（こしごるわ・斜面の一部を平坦にして陣地としたもの）が2～3段造られている。

腰曲輪 1, 2　　南丸の北斜面を削って平坦面を形成している。これらの曲輪は、本丸と南丸間の尾根東斜面を登る攻手を防ぐため設けられている。腰曲輪1は約24m²、腰曲輪2は約30m²を占める。なお土置き場を確保するため、曲輪1, 2の各半分を調査した。

調査の結果、斜面を削り、その土を斜面に積んで平坦面を拡げるという造作が行われたことを確認した。しかし、いずれの曲輪からも遺構、遺物は確認されず、造り付けの柵等の防御物はなかったことが判る。

南丸周辺の斜面　　南丸周辺の斜面地に堅堀（斜面に縱方向の堀を設け、敵の進入を妨げるもの）、柵などの防御施設が存在したかを確かめる試掘トレンチを10か所設定し、調査を行ったが、遺構は確認されなかった。

⑤二ノ丸　　二ノ丸南端は南丸から延びる尾根が続いており、接点の尾根には切岸（切り通し）を作り、土壘を設けている。今回、土壘の内側（北側）の平坦面を2か所（二ノ丸トレンチ1・2）調査したところ、幅約3mの堀切が確認された。堀切の深さは約1.3m、断面形は逆三角形で、いわゆる薬研堀である。中央部が深く、両端は浅く緩やかに掘られている。

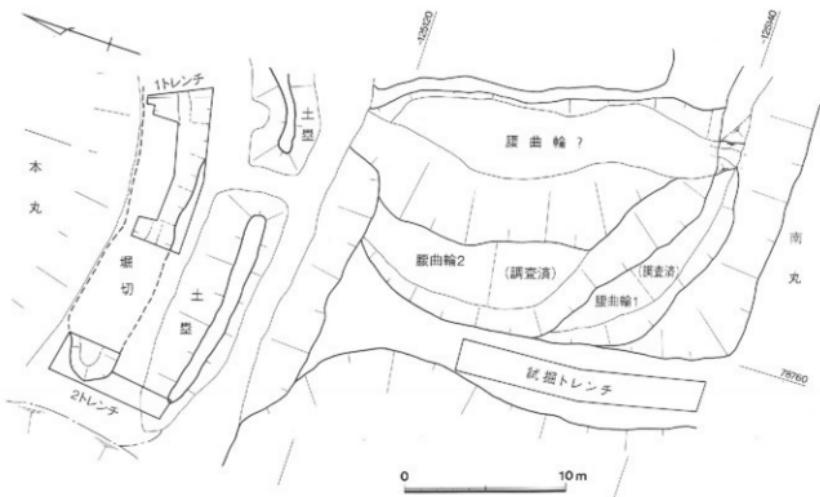


fig. 443 稲曲輪 1, 2 平面図

堀内は概ね、褐色系の混礫砂が堆積しており、一度に埋め立てられた可能性が高い。遺物は出土しなかった。

3 トレンチ 二ノ丸南端の堀切は西側は、大きくえぐれて谷に落ち込んでいるが、この部分を越えると再び平坦面が本丸を取り巻く。この平坦面に1か所、トレンチを設定し調査を行った。ここでは、表土下に厚さ約20~30cmの礫混じりの盛土層、その下に5cmほどの厚さで炭層

が部分的に堆積していたが、明確な遺構はトレンチ内では検出できなかった。次回の調査では、この炭層の範囲、性格を明らかにしたい。

3. まとめ

今回の調査では、茶臼山城の南丸平坦面とその周辺および二ノ丸の一部の調査を行い、南丸の遺構配置状況や周辺斜面の遺構の有無、二ノ丸南端に掘切が存在することを発見した。これまでの調査によって明らかになったことは、以下のとおりである。

- ①本丸、南丸とも頂上の平坦面はよく残っている。昭和61年に行われた本丸の部分的な試掘調査の結果では、基壇を持つ礫石建ちの建物跡の一部を検出している。これは土盛りの基礎の上に礫石を据えた立派な建物であり、その当時の有力な武士階級しか造ることができない建物である。この城の主殿建築物（城の中核となる建物）と考えられる。
- ②南丸平坦面には、小規模な掘立柱建物が存在していた。これは、城兵が雨露を凌げる程度の番小屋であったと想定される。また、ピット（柱穴）の検出状況から、平坦面全体を柵で囲っておらず、攻手の登ってくる可能性の高い尾根筋の堀切付近に一部柵を設けている



fig. 444 曲輪

のみで、その他の部分は、楯あるいは杭等を打ち込まない構造の銃弾や弓矢から身を守る防御物が並べられていた可能性が高い。城郭の配置や遺構の検出状況からみて、この城は本丸の北側を攻手の攻撃正面として捉えており、南丸は南側尾根筋を通って後方から襲う攻手を止める役割を果たし、本丸の南の備えという補助的な役割を持つため、建物や施設については本丸よりもより簡単な構造であると説明できる。

③本丸の一段下に二ノ丸と推定される平坦面が取り囲んでおり、数か所に土壘が良好に残っている。また、二ノ丸と南丸を繋ぐ尾根の接点には、切り通し、土壘、さらに堀切が設けられており、尾根伝いに進む攻手の進撃を阻み、多大な犠牲を払わせるような工夫が施されている。また、本丸と南丸の尾根東斜面には腰曲輪を数か所設け、東側斜面を登る攻手を防ぐため設けられている。

④南丸から延びる2か所の尾根には、各々、堀切を設けて敵の進入を防ぐ工夫が施されている。これらの堀は平成5年の調査で薦研堀であることが判明している。

⑤造成工事に伴って削られる部分（後述の土橋状遺構、出丸推定地）の発掘調査を今年度行った。その結果、出丸と南丸を結ぶ尾根筋にある細い道が、土橋状遺構に加工されていることを確認し、その形状、構造を明らかにすることができた。

南丸を攻める側は、この土橋状遺構を一列縱隊で渡らねばならず、その間に南丸を守る側は、弓または鉄砲で一人ずつ狙い撃ちできるようになっている。

⑥出丸と想定される地区には前回の調査で確認されたように、尾根の頂部と斜面にピットと土坑が散在しているだけで、明確な城構えをしておらず、極めて臨時、応急的な郭であることが判った。

以上のように各遺構は有機的に結合している。これらが一体となって茶臼山城を形成しており、きわめて保存状態の良好な山城であることが確認された。



fig. 445 茶臼山城址遠景

10. 淡河・萩原城遺跡 第5次調査

1. はじめに

萩原城は、播磨国淡河荘地頭職であった中嶋氏が1276（建治2）年に築城したものといわれている。

その後、中嶋氏が加担していた尼子春久が播磨乱入後撤退するに及び中嶋氏も、西播磨へ退去したのが1540（天文9）年といわれる。

1554（天文23）年、有馬重則が三木別所氏と交戦に及んだ時、三木別所氏の旗下に属していた淡河氏も有馬氏に反すこととなった。この結果、淡河城とともに、萩原城も落城したと伝えられている。

1560～70年？には三津田城（三木市志染町）から天正寺城（淡河町）に移った有馬則頼が萩原城に入城していたと考えられている。

1578（天正6）年～80（同8）年にかけ、三木別所氏が信長に反旗を翻した時、別所氏方の淡河氏と有馬氏は対立することになったが1579（天正7）年、淡河定範が三木城に敗走したため有馬則頼は淡河城攻略の功として、淡河城を賜り城主となつた。これにより、萩原城は廃城となっている。以上から、萩原城は1276年から1579年までの約300年間の長期にわたり歴史の舞台に登場した中世城郭であったことがわかる。



fig. 446
調査位置図
1 : 2,500

2. 調査の概要 今回の調査地区は、本丸（主郭）の北側に広がるいわゆる式の丸に相当する部分（H・I・J・K・L区）と西側に南北にのびる谷状部分（M・N区）およびその北の道に挟まれた三角形部分（O区）である。

H～L区 現在までに確認した遺構は、堀・石組遺構・壇状遺構・柱穴・土坑・集石土坑がある。

堀 SD06 H区南半～L区北半で検出したもので、検出長約17m、最大幅約4mを測る。堀底は南に向かい上がっており、南端ではスロープ状となってL区平坦面に続いている。北端と南端の高低差は約3.5mである。

SD05 K区南西隅にある南北方向のもので、現存長約10m、幅約3m、深さ約1.2mを測る。この北にある堀（SX12）と同一のものかどうか断定できない。

SX12 SD01 が埋没した後で、その西端を切って築造された南北方向の堀で、その南端部は屈曲して西にのびている。H区で昨年度確認した幅約9mの堀（SX09）はこの堀を切って作られている。

幅約4m、深さ約1.9m、南北長約10mである。

SX13 I区北辺にある東西方向の堀で、西端はH区 SX09 の北半部につながる。I区での検出長約20mである。

SD01 J区中央部の東西方向の堀で、東端は南に約8m折れ曲がってのびている。最大幅約5m、南端での深さ約1m、西端での深さ約2mである。

SX12との接点から西へ約3mで堀底が急激に立ち上がり、西端となっている。東西長約27m、南北長約12mある。

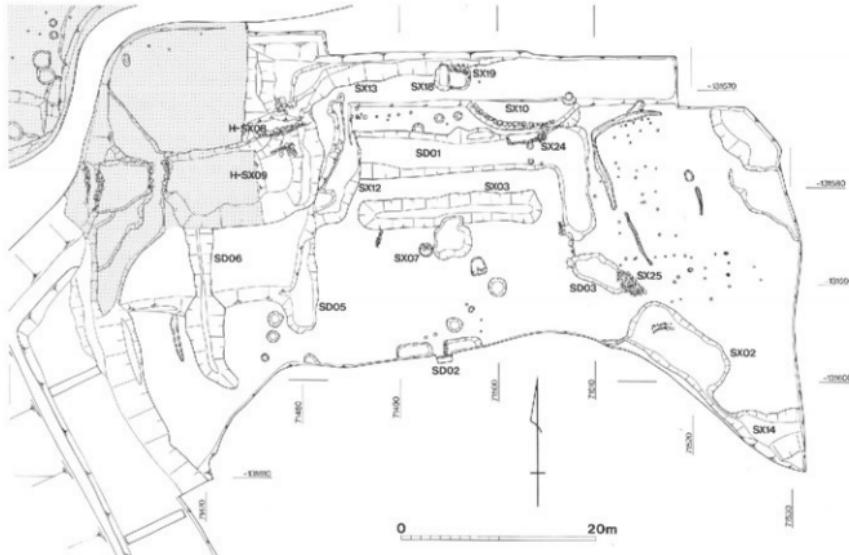


fig. 447 H～L区遺構平面図



fig. 448 SD06



fig. 449 SX08・SX09



fig. 450 SX08



fig. 451 I～K区

- SX03 K区北西部でSD01と約2.5mの間隔をおいて東西に平行してのびる、長さ約19m、幅約3m、深さ約1.3mを測る。
南辺を近世の土坑(SX06)に切られている。
- SD03 SD01南端と約1.5mの間隔をおいて、その南側で検出した掘である。幅約3m、長さ約6.5m、深さ約0.5mである。この掘の埋没後、石組遺構(SX25)が築造されている。
- SX02 SX03の南東にある幅約5m、長さ約11m、深さ約0.5mの北西—南東方向の堀である。西隅と南東隅から小溝がのび、後者はSX14とつながる。この掘が埋没していく途中で北西部に2列の石列遺構が構築されるが、その性格は判然としない。
- SX14 K区南東隅で検出されたもので幅約5mを測る。深さは東端がもっとも深く約2.5mである。
- SD02 K区南辺で、本丸への現通路の北側で検出された東西方向の堀である。幅約1.5m、長さ約9m、深さ約0.4mを測る。中央部に陸橋がある。
- SX09 SX09は先年度に検出していた堀で、I～K区との遺構の連続を明確に把握するため、
SX08 石橋(SX08)を挟む南北約20m、東西約7mの範囲を再度発掘した。

その結果、先年度掘底と考えていた所は、近世に石橋（SX08）を構築した時点の底面であり、当初はこれより約1.3m深かったことが判明した。よって堀（SX09）は深さ約2.7mとなる。

また石橋（SX08）の南側の埋土中から、東西方向に横たわる長さ約2m、直径約0.25mの建築部材が出土した。部材には中央に長方形のほぞ穴があり、これと約0.6m離れた東側にももう一か所ほぞ穴がある。

堀埋土中からはこの他、一石五輪塔や白磁碗片などが検出された。

石組遺構 J区中央で検出された東西約12m、南北約3mの半月形土坑の南辺に沿って現存2段の

SX10 石組を構築した遺構である。北側は近世以降の田圃塗造時に削平を被っており、本来の形状、規模などは不明である。

SX19 I区中央で後述のSX18に切られた状態で検出された遺構である。東西長約2.5m以上、南北幅約2.5mの長方形土坑の内部に拳大～人頭大の石で現存4段の石組を構築している。坑底からキセル・木製品などが出土し、近世後期のものと判断された。



fig. 452 SX10



fig. 453 SX18 + SX19



fig. 454 SX25



fig. 455 SX24

- SX25 K区の堀 SD03 の埋没後に構築されたもので、幅約 2 m、長さ約 3 m を測る。北辺、西辺、東辺に約 0.4 ~ 0.5 m の石を配置し、その内部に径 0.1 ~ 0.2 m 程度の小石を充填している。内部から土師器鍋、鉄器、一石五輪塔地輪部が検出された。16世紀代と思われる。
- 壇状遺構 J区 SD01 内に作られた東西および南北に石垣を施した壇状遺構である。4段の石垣が残存している。この遺構の南、SD01 堀底に、南北に並ぶ 2 基の柱穴があり、これとなんらかの関連があるものとも考えられる。
- 柱穴 J区西端部、J区・K区東半部でややまとまった柱穴が検出された。J区・K区東半部のものは、東西ないし南北に並ぶものもみとめられ、柵列や掘立柱建物になる可能性があるが、十分に検討しえていない。
- 土坑 SX18 I区で検出された南北長約 3 m、東西幅約 1.5 m の長方形土坑で、北端の埋土中から寛永通宝が 7 枚重なった状態で検出された。
- この他 J・K・L区から円形、楕円形土坑が 10 基確認されたが、それらの多くは近世に属するものと考えられる。
- 集石土坑 直径約 1.4 m の土坑内に直径約 1 m の桶状のものを掘えたと考えられる遺構で、埋土上
- SX07 層に径 0.1 ~ 0.2 m 程度の小石を投棄していた。坑底には長さ約 0.2 ~ 0.3 m の石を敷き並べていた。この石に混じって近世以降の丸瓦片が検出された。
- M・N区 南側の N区 は現状では標高 153.05 m の水田面で、北の M区 は標高 151.87 m で両者の間には約 1.2 m の高低差がある。
- N区は調査の結果、耕土下に約 1.5 m の盛土があり、その下は地山面となっていた。遺構・遺物とも検出されなかった。
- M区についても耕土下に約 1 m の盛土があったが、その下は深い谷状地形を平坦にするために、大量の土砂が搬入されていた。
- M区の谷状地形を確認する意味で、まず東西方向のトレンチを 3 本設定し調査したが、南端の第 3 トレンチでは、既に地山面に達している事が確認された。一方、第 1 トレンチでは、標高 147.8 m まで掘削したが、地山に達せず、第 2 トレンチでも約 1 m 挖り下げたが地山に達しなかった。
- この谷の埋土中から、江戸時代後期の陶磁器類が出土し、地形の平坦化、おそらく水田化がこの時期に成されたことが判った。
- 圃場整備事業に伴う工事影響レベルに抵触せず、かつ多量の土砂を掘削移動する時間的余裕を確保することもできなかったため、当地区の調査を終了した。
- O区 調査の結果、この地区は周辺道路の建設の際、バック・ホー等により上面は削平を受けていることが判明した。ただ、調査区北側に地山の落ち込みが検出され、萩原城に入る本来の道と推定されている当区北側の道の南肩部とも考えられる。
- 当区からの遺物の出土はなかった。
- 3.まとめ この萩原城は、前記のように築城から廃城まで約 300 年という長期間にわたり使用されづけた城で、その間に何度も作り直しが行われたと考えられる。
- 今回検出した各遺構の年代については、遺物整理が未完のため、決定すること今は避けたいが、土坑の大部分は近世に属するものとみられる。また、石組遺構 SX10・19 も江戸

時代のものと推定される。

堀の中で江戸時代と言えるのは、SD02で、これより本丸に入る道も築城当初の姿を留めているのか、再検討が必要になったと思われる。

H区の堀 (SX09 = I区 SX13) も江戸時代以降に改変されている可能性が高いが、築城時の堀がこれとほぼ同一箇所に巡っていた可能性も否定できない。

これら以外の堀に関しては、その埋土中から確実に江戸時代下る遺物が検出されなかつたことから、鎌倉時代～安土桃山時代の間に掘削されたことが推定されるが、これも遺物の検討を終了した後に検討を加えたい。

今年度の調査で当初予定していた萩原城遺跡の発掘調査は終了した。多くの遺構・遺物が検出され、萩原城の変遷等を知る上で貴重な資料を得ることができた。

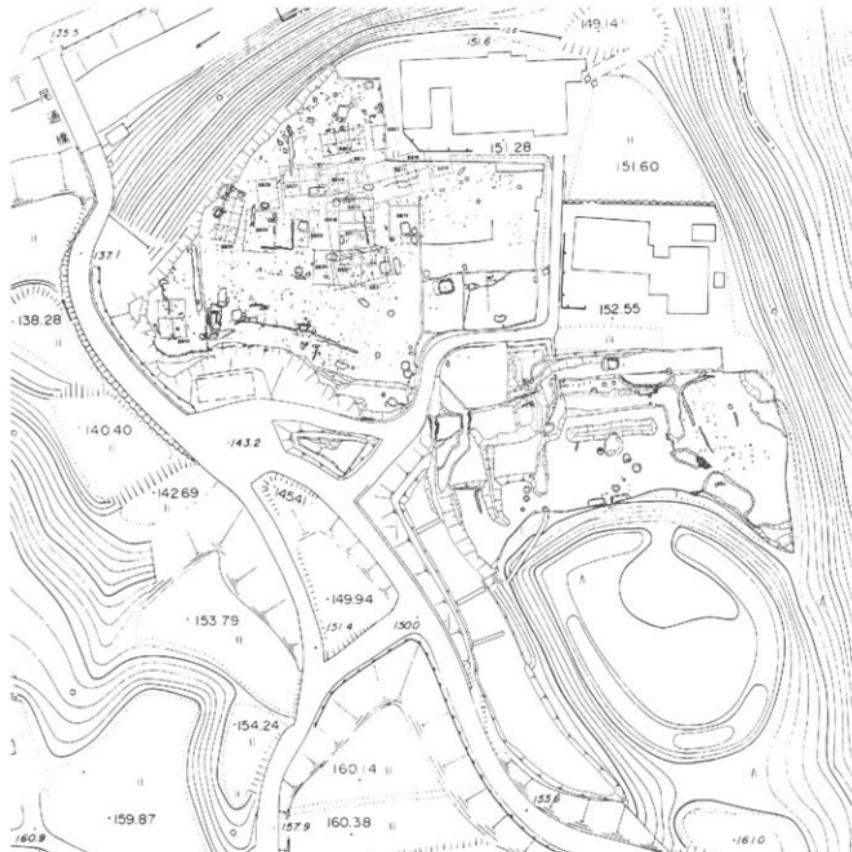


fig. 456 平成5～7年度調査 検出遺構平面図 1:1,000